

# A Study of Haribhaṭṭa's Jātakamālā (6) : A Translation and Folkloristic Remarks of Kinnarīsudhanajātaka

岡野, 潔  
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授

<https://doi.org/10.15017/6781004>

---

出版情報 : 哲學年報. 82, pp.37-125, 2023-03-14. Faculty of Humanities, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# ハリバツタ・ジャータカマーラー研究(六)

——キンナリー・スダナ・ジャータカの訳と民話学的考察——

岡野 潔

本論文は『ハリバツタ・ジャータカマーラー』の第二五話、キンナリー・スダナ・ジャータカの和訳と研究を行う<sup>①</sup>。その章の内容たる話を以下、スダナ説話と呼びたい。

ジャワのポロブドゥール遺跡(七五〇年〜八五〇年)の第一廻廊から第二廻廊にかけて多数あるインドの仏教説話(ジャータカ・アヴァターナ)の浮彫の中で、説一切有部(以下、有部と略する)の伝承に基づくスダナ説話を描いた浮彫は、仏伝『ラリタヴィスタラ』と上下に並んで、巡礼者たちの長い廻廊巡りのスタート地点という特別な位置に置かれ、二〇枚の大レリーフがその説話だけに割り当てられていて、明らかに諸説話の中で特別の扱いを受けている。そのことから、八〜九世紀のインド仏教文化圏の中で特に北伝仏教の影響が強い地域では、このスダナ説話が最高の人気を得た話だったらしいと知ることが出来る。

中央アジアのキジル石窟の諸壁画に目を転ずると、悪魔洞(No. 199, Teufelshöhle)においてこのスダナ説話が、少なくとも二一の個別の場面をもつ一連の長い壁画として、有部の伝承に忠実に従って描かれている<sup>②</sup>。これほど各場面が細かく丁寧に描かれている点で、この説話は仏教説話を主題にした壁画の中でも、特に重要な扱いを受けている話の一つといえる。五〜六世紀頃のクチャの地でのその説話の人気を伺い知ることが出来る。

アジャンター遺跡でも、スダナ説話の壁画は第一窟の中央入口を入った左手にある<sup>③</sup>。左壁から前廊左部にか

て描かれたその壁画は五世紀後半のものと見られるが、それはこの話が西インドで五世紀頃にはすでに人気ある仏教説話の一つになっていたことを示す<sup>(4)</sup>。

さて有部系の伝承に基づくスタナ説話は、インドのハリバッタとクシェーメンドラの両詩人のそれぞれの梵語仏教説話集において、特別な扱いを受けている。特別な扱いとは、作品全体の諸章の中で、スタナ説話だけが特別な長さをもって語られているのである。

クシェーメンドラの『菩薩アヴァダーナの如意蔓』(二〇七の章が現存する)ではスタナ説話の章は三三八詩節を有し、その章に費やされた詩節数の多さにおいて、その作品にある他の一〇六の章の説話を断然引き離している<sup>(5)</sup>。また、同様のことを言えるのがハリバッタの作品である。ハリバッタ・ジャータカマーラーの第二五話『キンナリー・スタナ』のもつ詩節数は二四〇あり、章の長さで第二位と第四位にあたる第三三話(二〇一詩節)、第二七話(九六詩節)、第二三話(八九詩節)と比べても、作品の全体の中でその章だけが異常な長さを与えられていることがわかる。

スタナ説話に対するこのような「特別扱い」が現存の梵語文献で歴史的に最初に確認できるのは、ハリバッタの作品からである。ハリバッタの作品はクシェーメンドラのものより六百年古い。私の推測であるが、ハリバッタはスタナ説話を自分の作品の「看板」にすることに、他のジャータカマーラーの諸作品と差別化する戦略を立てたのではないだろうか。特に、同じ文学ジャンルの創始者・先行者であつて最も尊ばれるアーリヤシューラの作品との差別化を強く意識していたのではないだろうか。

アーリヤシューラのジャータカマーラーがもつ全三四話の中で、恐らくその製作当時に最も人気があつた本生話はヴェイシュヴァンタラの話であろう。その話に相当する、南伝のパーリ語の本生話はヴェッサンタラ・ジャータカであるが、その本生話はパーリ正典『ジャータカ』のしんがり(第五四七話)に置かれ、最も詩節数が多い話である。

七八六詩節もある。その圧倒的な詩節数の多さは、『ジャータカ』の本文(韻文)が作られた時代に、そのパーリ聖典を伝持した分別説部の故地(西インドか)でその話が最も人気が高かったことを示すものである。北方仏教のスタンナ説話をあまり知らない南方仏教の諸国(タイ・スリランカなど)では、現在でもこのヴェッサンタラが一番人気のジャータカである。そしてスタンナ説話はパーリ『ジャータカ』の中に見当たらない。

インド仏教徒が生み出すジャータカは時代によって傾向や好みが変化してゆくが、紀元後の時代に作られた新しいジャータカは、その当時インド仏教の中心地になりつつあった西北インドの民衆の好みに合わせて、菩薩の利他的な自己犠牲の精神を強く打ち出した「捨身」ものが多くなってゆく。紀元前の時代に作られた古いパーリ正典『ジャータカ』においては自己犠牲的なジャータカの数はまだ少数である。その少数の中でも、過激な利他行の性格をもつ話、すなわち自分の地位もすべての財も捨てたあげく自分の二人の子供や愛妻までも布施してしまうという凄まじい利他行を行う話が、そのヴェッサンタラ、すなわちアーリヤシューラのヴィシュヴァンタラの話なのである。この古く由緒あるジャータカの人気は紀元後までずっと続いたに違いない。

恐らくアーリヤシューラの時代まで、人気度においてジャータカの王座に君臨していたであろうヴィシュヴァンタラの話は、やがて北インドにおいて人気をやや失い、有部で新たに編集された極めて筋立てが面白く出来たジャータカ(菩薩アヴァダーナ)、すなわちスタンナ説話によって、人気度の王座を奪われるようになったのではないだろうか。もちろんその好みの変化は急激なものではなく、インド仏教徒たちの社会集団の基層的な変化として数世紀かかったものであろうけれども。北インド(有部の有力な地域)におけるヴィシュヴァンタラ人気の徐々なる衰えについての私の憶測には根拠がないわけではない。十一世紀のクシューメンドラの作品を見ると、ヴィシュヴァンタラ説話はかなり素っ気ない扱いをされている。スタンナ説話ほどに詳細に描くことをせず、その話の章(第三章)は五四詩節で済まされている。この詩人にとって特に重要な説話とは思えなかったのだろう。また八〜九世紀のポロブ

ドゥール遺跡を見ても、ヴィシユヴァンタラ説話は第一廻廊の欄楯上段に、たった四枚の小パネル（三六―三九図）が割り当られているにすぎない<sup>⑥</sup>。ただしアジャンター第一七窟にあるその説話の壁画は二五の細かな場面を有する大きなもので<sup>⑦</sup>、五世紀後半頃の西インドでその人氣が続いていたことがわかる。

もしヴィシユヴァンタラ説話の北インドにおける人氣の凋落という現象が六世紀頃から徐々に起こった現象であり、その人氣がハリバッタ（四世紀後半頃の活動か）の時代の後までずっと続いていたとしても、スタナ説話が北インドで大きな勢力をもつ有部系の律藏中にある説話の一つとして三―四世紀頃に成立して、その面白さから次第に人氣を集めるようになると、ハリバッタはその時代の新しい動きを敏感に感じとり、アーリヤシューラの作品には無かったその話を、自分の新しいジャータカマーラーの「看板」として入れて、特別扱いすることを考えたのではないだろうか。そのことで、アーリヤシューラやそれに追隨する詩人たちの作品から大きく差別化をはかることが試みられたのではないか。―これが、私が考える、ハリバッタのスタナの章の異常な大きさの理由である。

スタナ説話は、ヴィシユヴァンタラのような凄まじい利他的行為を少しも行わないが、英雄たる者（菩薩）の試練克服の話、つまり精進波羅蜜に属する話としてならば、ジャータカの範疇の中に入れてよい話である。大乘仏教が確立してゆく紀元後の数世紀においてひどく流行した捨身ジャータカとは無関係で、単に「妻への愛に執着した菩薩の冒険の物語」にすぎないこの話は、紀元前の時代であったら、話の性質上、菩薩の道德的模範行為を説く本生話とはとても認められなかったかも知れないが、六波羅蜜の思想でジャータカを整理区分することが確立した紀元後の世界では、精進ジャータカの一つとして本生話と認められ<sup>⑧</sup>、その庶民受けする性質のゆえに、四世紀頃には次第に人氣の高い本生話となってゆき、それ故にハリバッタに大きく取り上げられることになったのではないか。ヴィシユヴァンタラ説話とスタナ説話を比べると、前者はあまりに仏教的な布施の教訓話であるが、後者はヒンドゥー教徒でも楽しんで聴ける物語であり、四世紀以降のインド仏教の凋落とヒンドゥー教の隆盛の時代には、後

者のほうが時代に向いていたと言えよう。

さてこのハリバッタ作のスタナ説話のあらすじを示せば、次の如くである。

〔Ⅰ 狩人が龍から与えられた魔法の投げ縄〕 苛税で民を失った国の王は、隣のダナ王の国に豊作をもたらしているその国の湖に棲む龍チトラを自分の国に掠ってくるよう、龍を支配する魔法をもつ人物に命ずる。その者は湖で龍を捕らえようとしたが、恐怖した龍自身から援助を頼まれた狩人によって殺される。救われた龍は喜んで、恩人の狩人を龍宮に導き、歓待する。アモーガという魔法の投げ縄が狩人に与えられる。

〔Ⅱ キンナリーの捕獲と結婚〕 狩人の死後、その魔法の投げ縄を受け継いだ彼の息子は、キンナリー（妖精的なキンナラ族の女）の一団が周期的に空から湖に水遊びに来ることを仙人から聞き、キンナリーを投げ縄で捕獲しようとして決意する。キンナラの王女マノーハラリーの捕獲に成功すると、彼はそのキンナリーをダナ王の王子スタナ（菩薩）に売る。その時、彼女がもっていた飛行を可能にする魔法の髻珠がスタナに渡される。主人公スタナとマノーハラリーは愛し合い、結婚する。

〔Ⅲ 女は王宮を脱出し、仙人に手紙を託す〕 二人の婆羅門が王宮内で憎み合った結果、一方の邪悪な婆羅門が、他方の婆羅門の支援者である王子スタナを亡き者にするために、まず王子の妻のキンナリーを殺そうと決意する。スタナは辺境の反乱を鎮圧するため、マノーハラリーを宮廷に残して出征したが、彼がいない間に、邪悪な婆羅門はダナ王の見た悪夢について偽りの夢占いをして、王はキンナリーを供犠に捧げなければ破滅する運命にあると王に信じ込ませる。供犠で殺される前に自国に逃げるよう、マノーハラリーは王妃（スタナの母）から秘かに忠告を受け、出征時にスタナが母に預けていた飛行の髻珠を受け取る。彼女は髻珠をつけて空に飛び立ち、キンナラたちの国に戻る。しかしスタナを愛する彼女は湖の近くに住む仙人の所に飛んで来て、スタナへの伝言を頼み、彼がキンナラ

国の彼女のもとに旅して来る時に必要な菓草と指輪と手紙を仙人に預ける。

〔IV 逃げた女を探し歩く〕 出征から王宮に戻ったスタナは半狂乱になってマノーハラーを捜す。その行方を知るため、森で鸚鵡・孔雀・鹿・蜜蜂・チャクラヴァアーカ鳥・蛇・太陽・月に次々と尋ねながら歩くが、誰にも答えてもらえない。彼が最後に仙人の所を訪れると、仙人はそのキンナリーからの伝言を彼に伝え、キンナラたちが棲む遠い国への旅に必要な預かり物(マノーハラーの書き置き、菓草、指輪)を手渡してくれる。

〔V 女を追う困難な旅〕 マノーハラーが書き残した指示どおりに旅に必要な物(琵琶・二本の鉄の長くぎ・槌・剣・矢・弓・菓草)と援助者の猿を用いながら、スタナは旅の難所を一つずつ克服する。ついにキンナラ国に着いた彼はマノーハラーに自分の到着を知らせるために、王女マノーハラーの水浴びのために水甕を運ぶ女召使の一人に指輪を託す(彼は水甕の中に指輪を入れたのではない)。指輪を見た王女は夫の到着を知り、歓喜して再会する。

〔VI 舅が課す試練の達成と帰国〕 キンナラ王は娘婿となるスタナに四つの難題を次々に課す。(a)川岸に生えた葦をすべて根こぎにすること、(b)その葦をすべて対岸に投げ、地面に胡麻を播いてから、播いた胡麻を再び回収すること、(c)一本の矢ですべての鉄製の的を射貫くこと、(d)マノーハラーと完全に同じ姿をしたキンナリーたちの中から彼女を見つけること。神々やマノーハラーの援助もあつて、それらの難題が達成され、キンナラ王は二人の結婚を正式に認める。王の宮殿で楽しく過ごした後、やがて夫婦二人は飛行してスタナの故国に帰る。

以上がハリバッタの第二五話の内容であるが、そのあらずじと、構成する諸モチーフを見ると、いかにこのスタナ説話がいかに日本の天人女房の説話と似ているかが理解されるであろう。東洋では天人女房、西洋では白鳥乙女として知られるその有名な話の昔話の国際昔話型分類番号は、ATU100 (=旧番号 AT100) である<sup>9)</sup>。以下、民話学の面から少しこの話を検討する。

ドイツで出版された『昔話百科事典』の「白鳥乙女」Schwanjungfrauの項の記述では<sup>⑩</sup>、中国の『搜神記』(四世紀)が白鳥乙女／天人女房の話の最古の文献と見なされているが、その記述は今では修正を必要とするようだ。日本の天人女房と話型がよく似たインドのスタナ説話は白鳥乙女の妻捜し・難題型の話にあたり、三～四世紀には存在していて、五世紀を下ることはない。インドのスタナ説話の古さは『搜神記』と同じか、それ以上に古い。従って、それぞれの伝承の古さから、アジアにおける天人女房の流伝は、中国系とインド系の二つに大きく分けて考察する必要がある。日本やタイなどの場合は、外来のその両系の口承伝承の混淆として説明できる。

日本の天人女房の昔話は離別型、天上訪問型、七夕結合型に分けられるが<sup>⑪</sup>、そのうちの天上訪問型が、妻捜し・難題型としてインド仏教の有部系の部派が伝承するスタナ説話とよく合致する。日本の天人女房の話型は、『日本昔話通観第二八巻昔話タイプ・インデックス』(二二一番、三三七～三三八頁)では、次の如くである。①男が水浴をしている天女たちの羽衣の一つを隠すと、一人の天女が昇天できず、男の嫁になって子を生む。②妻は子に教えられて羽衣を見つけ、瓜の種を残し、瓜の蔓を伝って天に昇ってこい、と書き残して天に帰る。③夫が言われたとおりにして天に昇ると、いやがった妻の親が畑仕事の難題をつぎつぎに出すが、すべて妻の助言で課題をしとげる。④親に瓜畑の番をさせられた夫が、妻の警告にもかかわらず瓜を縦切りにして食うと、あふれ出た大水で川むこうへ流される。⑤妻が、七日ごとに会おう、というが、夫はそれを七月七日と聞き違い、二人はその日しか会えなくなる。――以上の①～⑤のうち、①②③の結合型が「天上訪問型」であり、インドの天人女房たるスタナ説話と合う。④と⑤は「七夕結合型」にある牽牛織女の七夕由来のモチーフであって、①②③の型に対する中国系の要素の付加なので、インドのスタナ説話には当然ながら無い。

『搜神記』(一四・三五四「鳥の女房」)の話は短く纏めれば次の如くである。①男が毛衣を着た女達を見つけ、その中の一人の衣を隠して、妻とする。②三人の娘が生まれ、妻は娘に教えられて毛衣を見つけ、天に帰ったが、後に



三人の娘を迎えに来て、一緒に飛び去った。—このような話である中国の『搜神記』や『玄中記』（四世紀頃か）の伝承は、インドの伝承と違って、話型の構成素材として①②はあるが、③の難題のモチーフが無い。それに対して、三々四世紀のインドの有部系スナナ説話はすでに①②③をそなえている。この相違点は古代世界における天人女房／白鳥乙女の話の流伝を考える上で重要である。四世紀頃のアジアにはその話に関してインドと中国とに、それぞれ古い伝承が存在していたが、恐らくその後、中国においても③の難題のモチーフが出現したと考えられる。その③の難題の東アジアでの出現は、インドから流伝した可能性を排除できないであろう。歴史的にみて、難題型のインド系と、難題要素を欠いた七星または七夕の要素をもつ東アジア系の、二つの流れを大別すべきである<sup>12)</sup>。

インドのスナナ説話は、日本およびタイやベトナムなどの東南アジアに見られる天人女房の「天上訪問型」（妻捜し・難題型）と、系統的に同一起源のものとして考察することが少しも無理ではないほどに、話型やモチーフの全体的な一致が見られる。日本や東南アジアにある天人女房の難題型は成立の遅さから起源的に外来のものであると言わざるを得ないが、それらはインド仏教の説話からの流伝の結果として話の主要部が生じた可能性が高い。

これまで天人女房の研究は随分行われてきたが、私の知る限り、その難題型がインド起源である可能性が日本できちんと主張されたことがないようだ。その理由も考えながら、インド仏教の古い資料について、まず説明してみたい。スナナ説話を扱う時、以下の、梵語の作品として現存する四つのインドのスナナ説話の存在とその成立年を考察する必要がある。

- (一) 根本有部律『棄事』のスナナ説話（『『ディヴィヤ・アヴァターナ』第三〇章』<sup>13)</sup>
- (二) 『ハリバッタ・ジャータカマーラー』第二五話
- (三) クシエーメンドラの『菩薩アヴァダーナの如意蔓』第六四章
- (四) 大衆部説出世部の『マハーヴァストゥ』<sup>14)</sup>

これらの作品のうち、まず(四)は、大衆部説出世部律から抜き出された仏伝記事を中核にして形成された、本生話を多く含む作品であり、遅くとも四世紀の編集であると諸学者によって推測されている。(三)はカシュミールにおいて十一世紀に作られたものである。(二)の作者ハリバッタは北インドで活躍した詩人であり、その第二五話のスタナ説話に執筆にあたって、小乗仏教上座部系の部派である有部に属する出家教団が伝持した梵語テキストを種本として使ったと考えられる。ハリバッタの作品の諸章は、(三)のクシューメンドラと同様に、有部系の部派の律蔵にある説話伝承を種本に用いることが非常に多い。(四)の作品は有部とは全く別系統の伝承であるが、(一)～(三)の三つの現存する梵文スタナ説話は、大きな観点から見ればどれも有部系の伝承であると見てよい。そして(二)と(三)のスタナ説話は恐らく有部系の中で同じ系統の伝承に属し、(一)とはやや系統を異にする。文芸作品である(二)と(三)の二者は、(一)の根本有部律とは違う、別の有部の律の伝承本を種本に使っているように思われる。(二)は話の大筋では(二)や(三)と合うが、しかしそれはあくまで「近い伝承」であって、ハリバッタやクシューメンドラが用いた種本そのものではない(15)。話の展開の細部に相違点が多すぎるからである。例えば、(二)と(三)の伝承では、妻の親から課される難題として「葦原を根こぎする」と「胡麻を地に播いて再び回収する」という農耕的課題が第一と第二に出てくるが、(二)には第三の「弓を射る」と第四の「娘選び」の二つの試練があるだけで、第一と第二の農耕試練が欠けている(16)。この農民的な二つの試練は、存在するほうが民話として本来的な形ではないかと考えられるから、それがすっぱり欠けている(一)のほうが伝承として古いとは言えないであろう。(二)は、弓を射るといふ勇ましい武人的試練だけで菩薩の力量を示すのが望ましいと考えて、そのためにその前に置かれた、神の援助なしでは菩薩が解決出来なかった二つの泥臭い農民的試練を話から削除した可能性がある。また、スタナの旅の出来事の記述でも、(一)は明らかに不自然に簡略化されている。(二)と(三)の両詩人が用いた種本は、(一)の現存する根本有部律を伝持した有部とは異なる、別の有部(西北インド

系か) によってその律蔵の中で伝持されていた同話ではないか。有部は巨大な部派なので、地方の分派ごとに若干異なる複数のスダナ説話が存在していた可能性が十分に考えられる。

さて(一)の根本有部律の編纂年代がクシャーナ朝期であって、四〜五世紀以降ではないことについて、G・シヨペン(二〇〇〇)の本は第一章で幾つもの論拠を示して、その証明に大いに貢献している。私も(一)根本有部のスダナ説話を遅くとも四世紀には存在していたと考えるが、それは、(二)の文学作品が成立した時代に、聖典としての(一)もとづくに成立していたはずと判断するからである。つまり(二)の存在が(一)の成立の下限となる。

(二)のハリバッタの作品の成立下限年の推測については、Hahn(1981)とDenoto(2009)の論文があり、その証明により漢訳『賢愚経』の編纂年である西暦四五五年までに——しかし恐らくはその年の二〜三〇年前までには——ハリバッタの作品が成立していたことは確実と見てよい。(A)ハリバッタの作品が成立し、(B)その梵文作品がインド内で評判になって、(C)写本がインド外にも輸出され、(D)その後中央アジアの或る言語による翻訳としてホータンで未知の作品か説法の原稿が作られ、(E)それから漢訳がなされて『賢愚経』として編纂されるに至る、その一連の(A)〜(E)の経緯が要した時間を考えると、必ず数十年はかかっているであろう。五世紀初頭が(二)の作品の成立年代の下限となるが、それはあくまで下限であって、ハリバッタの活動期間は四世紀の後半頃とみるのが現実的かも知れない。するとハリバッタが種本とした有部の聖典はいつ頃だろうか。現代の出版物のように急速な普及と人気が古代にありえたはずが無いから、①有部の律蔵におけるスダナ説話の編集・確立↓②その説話の北インドの有部系諸僧院における普及↓③民間での人気化↓④ハリバッタによる文芸化、の四段階のプロセスがあったと考えると、①から④に至るまでに、一世紀程度の時間は必要であろう。すると①は三世紀頃と見積もることができる。なお有部系ではないスダナ説話は『六度集経』にあり、呉の康僧会によって三世紀中頃に建業で漢訳されている<sup>17)</sup>。その『六度集経』にあるスダナ説話(第八三話)は、(四)『マハーヴァストウ』(遅くとも四世紀)にある同じ説話と

話の組立がかなり似ているので、両話は近い関係にある部派で、近い時代に形成されたものであろう。北や西インドの仏教諸部派はどれも二〜三世紀には各自のスタナ説話を持つていたに違いない。従ってインドの有部律蔵中におけるスタナ説話の成立もその頃と見てよいと思うが、しかし『六度集経』と『マハーヴァストゥ』のスタナ説話は難題型ではない。つまり妻捜しの達成は語られるが、その後に見が課す難題は何も語られない。恐らくスタナ説話は最初の古い形態では難題型ではなく、ある時に有部の内部でその話をもっと面白くなるように再構築が行われて、難題型になったのではないか<sup>18)</sup>。するとインドにおける天人女房難題型としての話型の完成は三世紀後半〜四世紀頃と考えられる。

さて二〇世紀後半に日本の民話学は盛んになったが、その学界がこれらのインド仏教のスタナ説話の存在と重要な意味に気づくのはかなり遅れたようだ。現在梵文で存在する三種のスタナ説話の中で、最初に日本の学界に翻訳として紹介された文献は(一)の、根本有部律『薬事』中にある同説話である。本邦における梵文スタナ説話の翻訳を見ると、(二)の文献は奈良康明(二九六六)と岩本裕(二九七四)と平岡聡(二〇〇七)と八尾史(二〇一三)によってそれぞれ訳され、(三)の作品は引田弘道(二〇〇一)によって訳された<sup>19)</sup>。(二)の作品は私の本論文によって初めて和訳される。

(一)の根本有部律『薬事』のスタナ説話は、それと同一のテキストである『デイヴィヤ・アヴァダーナ』からの翻訳として、一九六六年五月に出た奈良康明の訳によって初めて翻訳が出版されたから、それを読めば人はこの古いインドの律蔵文献中の話が驚くほど日本の天人女房の天上訪問難題型の話と合うことに気づいたはずである。しかしどうも日本民話学ではそのことが長い間気づかれなかったようだ。一九六六年十一月に出た関敬吾の『昔話の歴史』の「天津乙女」の章や<sup>20)</sup>、七七年に出た『日本昔話事典』の「天人女房」の解説を見ても、七八年に出た小

澤俊夫『世界の民話二五巻解説編』を見ても、その重要な書承をどうやら知らないでいる。しかし八二年の吉川利治<sup>②</sup>、八三年の井本英一の論文において、このインドの根本有部律『薬事』（『デイヴィヤ・アヴァダーナ』）の伝承の存在に気づき、それを指摘した学者が日本に現れ始めたことがわかる。しかしこれらの論文では『薬事』の話の重要さに気づきはしているが、そのインドのスタナ説話の資料年代の考察が説明に欠けていたため、あまり日本民話学の学界全体に強い印象を与えなかったようだ。九三年に稲田浩二<sup>③</sup>『日本昔話通観研究編一 日本昔話とモングロイド』が出て、そこにアジア地域を中心にした諸国の「天人女房」にあたる多数の口承伝承が列挙されるが（二六三―二七四頁）、類似話の列挙だけで終わり、アジアでの分布状況や流伝の考察などは行わなかった。また九八年に日本昔話の書承の面に焦点を当てた稲田<sup>④</sup>『日本昔話通観研究編二 日本昔話と古典』が出版され、「天人女房」をめぐる古典文献の情報が示されるが（二二八―二三三頁）、ここでは『デイヴィヤ・アヴァダーナ』のスタナ説話について記しながら<sup>⑤</sup>、その梵文説話と全く同一のテクストの漢訳が漢訳大蔵経中の根本有部律『薬事』に存在するという、資料の年代決定の上で重要なことを記述しておらず、インドの古典資料の年代に関する問題意識が欠けていると言わざるを得ない。古典資料を扱う場合、成立年代の記述を欠いては、資料の価値が半減する。日本の天人女房とインドのスタナ説話がよく似ていて、しかもその話が漢訳の根本有部律にあり、その梵語原典が極めて古いことは、日本を含む東アジアにおける天人女房の話の伝承を考える上でも、見落としてはならないことである。

インド仏教のスタナ説話は、八世紀初頭の義浄の訳として漢訳大蔵経中の根本有部律『薬事』（大正蔵、第二四巻）卷十三―十四にある。根本有部律が説話の宝庫であることはよく知られている。律蔵の説話はさほど難しくない漢文であるから、日本でも平安時代頃から漢文が読める知識人・僧たちはそれらの漢訳蔵経中の種々の説話を読んで楽しんだはずである。知識人たちはそれらの読んだ説話を周囲の人に語り聞かせることが出来たし、僧たちはそれを説経の語りの折に利用出来たであろう。従って、漢訳大蔵経の中にあるインドのスタナ説話と日本の「天人女房」

天上訪問型の話がとても話の筋がよく似ているならば、まず漢訳大蔵経という書承の説話が民間に流れて、「天人女房」という口承の日本昔話になったことを疑ってよいはずである。その日本における「書承↓口承」の流れの可能性や、またアジアの仏教国におけるその説話の伝播状況について言及することなく、その説話について日本の各地の口承話の分析ばかりで観察を済ませてしまう『日本昔話事典』の「天人女房」の説明には驚かされる<sup>23)</sup>。

世界の中でも地域的偏差から見れば特に日本や東南アジアの地域に色濃く見られる、天人女房難題型に分類される話は、歴史的にインド起源と見てよいように私には思われるが、今後のスタナ説話⇨天人女房の伝播の研究にあたっては、更に、「大伝統⇨小伝統」「書承⇨口承」という流れを想定しながら考察すべきではないだろうか。つまりインド仏教の有部系の律蔵中のスタナ説話が仏教の伝播によってアジアの地域に伝わり、元は大伝統(社会上層部の知識人層に支持された文化的伝統)に属する書承であった宗教話がやがて小伝統(庶民の文化的伝統)に移行して、各地の口承の民話になったという歴史的展開を一つの力強い仮説として想定すべきではないか。この点について恐らく質問も出るであろうから、この私見について、以下にもう少し説明したい。

インドの小乗諸部派中がかつて最大の勢力を誇った部派である有部がインドから東南アジアや中央アジア方面へと教線を拡大するに従って、有部系のスタナ説話もインドからそれらの地域に持ち込まれた。そのことの証拠がインドネシアのボロブドゥール遺跡や中央アジアのキジル遺跡にあるスタナ説話の浮彫や壁画の存在である。

義浄の『南海寄帰内法伝』の報告によって、シュリーヴィジャヤ王国など南海・東南アジアの諸国に根本有部の部派がインドから進出して存在していたことが確かめられる。有部の出家サンガはさすがに中国には進出できなかったが、中央アジアには三〜八世紀頃に天山南路沿いに有部系の僧院が多数存在していて、その地域に有部系の律文献を知る僧たちがいたであろうこと、またコータン語の有部系スタナ説話も数種存在したこと<sup>24)</sup>、またチベット族(吐蕃)が八世紀後半〜九世紀にシルクロードまで勢力を拡大し、十世紀以降もしばらく異民族の間でチベット語が



共通語として使われ、モンゴルの諸民族がチベット仏教を篤く信仰して自国の僧たちをチベットに留学させて学ばせていたこと、などを考えあわせると、有部系の梵語の律やチベット語訳・漢訳の根本有部律にある人気の高いスダナ説話が中央アジアからモンゴル高原にかけて広く伝わった可能性は大いにある。有部の拠点であった西北インドから西へ行く貿易商人たちによって有部の伝持した説話が西アジアに運ばれた可能性も考えられる<sup>25)</sup>。

さて東南アジアや中央アジアにおいて、有部の出家僧団が在家信者を宗教的な權威をもって支配した間は、書承の聖典としてのスダナ説話とは異なる口承の伝承がたとえ信者たちの間で発生しても、それが許される余地はなかったといえる。有部が存在した地域においてはスダナ説話は「大伝統に属しており、小伝統における別の伝承の存在を許さないものであった。つまりその説話は仏説たる律蔵に属する一つの「聖なるテキスト」であるから、有部の教団が支配的である地域においては、その教団の下にいる在家の仏教徒たちがスダナ説話を勝手に変形したりして口承化することは許されなかつたはずである。しかし十三世紀以降、インド仏教の大伝統の衰退に伴う伝承の「局地化」という現象が拡がる。インドからも中央アジアや東南アジアからも有部の教団が消滅するにつれて、それらの諸地域でスダナ説話はどんな変更も許さぬ「聖なる伝承」であることをやめて、単なる民間口承説話の一つに変わっていった。出家教団の統制というタガが外れたその結果、本来は小乗仏教聖典のスダナ説話に由来する話がアジア各地で多様に変化していったと思われる。また東アジアやチベット・モンゴル地域ではインドの梵語の根本有部律は漢訳（八世紀）やチベット語訳（九世紀）が作成されていたため、『葉事』のスダナ説話はまず書承の話として漢文や古典チベット語が読める知識人たちに知られたはずであり、その後、口承化され、民話化して、庶民の間に拡がっていったと考えられる。

東南アジアにおいて力を失い消滅していった有部系の出家教団の後釜として、十三世紀後半以降にパーリ上座部がその地域に支配を抜げてゆく時に、パーリ上座部には元々スダナ説話が存在しなかつたにもかかわらず、その地

域に残っていた有部に由来する口承話のスタナ説話を、パーリ上座部の僧たちが拾い上げてパーリ語化し、ビルマ所伝やタイ所伝の『パンニヤーサ・ジャータカ』(五〇ジャータカ)の中の一章として結実させた<sup>26)</sup>。ただし東南アジアの諸国に数種類伝わるその書承のパーリ語説話集『パンニヤーサ』は仏説の正典ではないため、民間に流れる口承の類似する説話を宗教的権威をもって正す力はやもたなかった。このように有部のサンガが東南アジアで消滅して、有部の書承の話であったものが民間での口承話と化した後、十五〜六世紀頃にパーリ上座部の僧が書き留めて再び書承になったと考えられるのであるが、しかし民間での口承話化に伴うスタナ説話の変化は、有部の出家教団の在家への統制力が及ばない地域においてすでに九世紀頃には秘かに進行していて、例えばポロブドゥールのスタナ説話の、『葉事』の伝承に基本的に従う二〇枚の浮彫製作において、その口承の形が影響を与えたという(Chen, 1966)が主張するような可能性はあるかも知れない。

以上のように、インド外のアジアの諸民族がもつ「天人女房」の昔話は、インド仏教の有部系の部派が伝持したスタナ説話がインド外の異民族に拡がるにつれて発生したと説明することが出来る。従って、アジアにおける天人女房難題型の昔話の形成・流伝史を理解するために、まず源流にあるインドの書承の有部系スタナ説話の現存する梵語三種文献の記述をきちんと押さえることが必要である。

インド起源がほぼ確実な日本昔話として、「鼠の婿選び」「猿の生き肝」「古屋の漏り」「大みそかの金馬」「雀の仇討ち」などがあるが、天人女房難題型の話もそこに加えてよいと私は考える。

さてスタナ説話は世界の多くの民話に見られる、半鳥半人／半鳥半神のイメージをもつ「白鳥乙女」「鳥女」のモチーフ(D36a.1)と切り離し難く繋がっている。神話と昔話の素材となる、鳥の如く空を飛ぶ超自然的部族のモチーフは、人類のどの民族でも自然発生的に生じうる普遍的なモチーフでもあるため極めて古く、この素材モチーフだ



けでは歴史上の伝播的な考察が困難であるけれども、このモチーフと強く関連する、スダナ説話を成立させるのに必須の要素であるところの、インドの「キンナラ」という特殊なモチーフについて、以下に少し説明してみたい。

梵語キンナラ (Kinmara) は、その女性形がキンナリー (Kinmari) で、「キンナラの女」という意味である。キンナラは漢訳で「緊那羅」とか「人非人」「是人非人」と訳された。それは古代インドでその存在が信じられた超自然的な種族の名である。大乘經典では仏法守護の八部衆の一つとして出てくる。キンナラの語は語源的に「あれは」人間かしら」という意味をもつ語で、人間と見紛う不思議な姿をした空想の「非人間」である。恐らく森などで目撃された人間によく似た獣が次第に神話化されて、半神半獣の超自然的な種族の名となったのである。キンナラたちのイメージは統一されておらず、ポロブドゥールやアジャンターやキジル遺跡にあるスダナ説話の浮彫図や壁画、またバルハット (Cum. XXVII, 12) にあるキンナラ夫婦本生 (Jataka No. 481) の浮彫が示すように、人間とほぼ変わらぬ姿で表現されることもあるが、南方仏教の美術に見られるように彼らはしばしば半鳥半人の姿で表現されることもある。しかしインドでも時代や地域が異なれば、それは半馬半人 (馬首人身) の姿のこともある<sup>26</sup>。キンナラはガンダルヴァ (乾闥婆) の一種と見なされることもあるが、しかし名称の相違に従って一応は両者を区別することが多い。『大智度論』巻十では以下のように説明される。ガンダルヴァは諸天の伎人であり、諸天に随伴する。その心は温和しいが、福德と力は弱くて、諸天と阿修羅 (鬼神) に劣る。彼らは六道のうち阿修羅道に属しており、龍のように畜生道ではない。キンナラもまた諸天の伎人であり、諸天に従属し、諸天と同じ様に住し、共に坐して飲食する。伎楽はみな諸天と同じである。ガンダルヴァの王はドゥルマ (樹) という名である。彼らガンダルヴァとキンナラは二つの場所に住していて、常に住する所は十宝山の間であるが、或る時は天上において諸天のために音楽をなす。

— 以上が『大智度論』の説明 (大正蔵二五卷一三五上) である。キンナラ族とガンダルヴァ族は、ふだんは地上の十宝山 (Akaramagiri) という高山に棲み、時に天界に昇って、神々に仕える音楽家として活動する。両者はこのように

多くの属性を共有している半神的種族なので、両者を同一視するのも、少しの違いがある別の種族と見るのも、どちらも自然なように思われる<sup>28)</sup>。有部律のスタナ説話から知られるキンナラ族は、ヴィディヤードラ族のように人が近づき難い地上の高い領域に住み、ドウルマを王とし、自分たちの王都を有し、人間によく似た姿の、人間よりやや高等な妖精的種族と見なされている<sup>29)</sup>。彼らは天界の神々と異なつて生得的能力としての飛行力をもつておらず、魔法的な着脱できる髻珠(マニチュダ)を頭に付けてはじめて空を飛行することが出来る。その魔法の髻珠を奪われてしまうと、空を飛べない。従つて、その着脱可能な髻珠こそが日本の天人女房の話の「脱げる羽衣」にあたるわけである。またキンナリーは人間の世界から逃げる時、本当の天界に行くわけではなく、ヒマーラヤの彼方の沢山の山や川を越えた所にあるキンナラたちの国に逃げるだけである。天界ならば人間には全く到達不可能であるが、地上にあるキンナラ国ならば、逃げた女の指示どおりに旅する主人公にとって、大変な困難を伴うものの、歩いて到達可能である。従つてその遠方にあるキンナラ国が、日本の天人女房の話では、「瓜の蔓をどこまでも伝つて昇つていけば到達可能な天」となりうるわけである。

このように、キンナリーがもつ、天女でもなく鳥でもない中間的な存在であつて髻珠をつけて空を飛び、高山に住む、という特殊なあり方が、スタナ説話をうまく成立させている。このキンナリーというインド特有の概念がないインド文化圏の外の諸民族の間にこのスタナ説話が伝わつてゆく時に、必然的に、それが鳥女や天女という各民族がもつ土着の素材モチーフに置き換えられ、また彼女がもつ飛行の髻珠がそれに代わる着脱可能な「羽衣」に置き換えられるという現象が起こつたと思われる。鳥の姿をした「白鳥乙女」は水浴の時に、羽をとつて人間に変身する必要があるが、キンナリーの場合は変身の必要がない。変身の必要がないことが、それがインド外で天女と鳥の両極に伝承が分裂する前の本来のモチーフであつたことを示している。

では以下に『ハリバッタ・ジャータカマーラー』第二五話の全訳を示したい。

## 第二五話 キンナラの女とスタナ王子のジャータカ

思うに、恋情を何者に対しても持たなければ、世界で、その人は安らかな幸せを保つことだろう。しかしそれが生じた時、まるで仇敵のように、大きな危難と苦しみが生まれる。(二五・二)

◇ 次の様に伝え聞いています。— (a) 人生の三目的(実利・性愛・義務)の増大に励む民をもち、(b) その〔国の〕繁栄にすべてのヴァルナ(四階級)・アーシユラマ(人生の四段階)の人が全く満足しており、(c) 沙門・婆羅門たちの行いが清らかであり、(d) 絶えざる豊作に歓ぶ村々の寺院の境内で歌舞を演じる芸人たちを觀て喝采する賑やかな村の人々がいる、ハステイナープラという偉大な都〔の国〕において、大きな財を有する、ダナ(財)という名の王がいました。

その王が息子を得ようとして、懸命に様々なデーヴァター(神的存在)に祈り願っているうちに、或る時、彼の妃に胎に菩薩(釈尊の前生)が生じました。

彼女が美しくも青白い顔をして、次第に妊娠の疲れから気怠そうになってゆく有様を觀るにつれて、王は〔次のような〕期待を大きく膨らませました。(二五・二)

「とうとう長く待ち望んでいた息子だ。幼い時は〔可愛らしさで〕私を楽しませてくれるだろう。若者になれば、王家を率いるという偉大な重荷を背負ってくれる。そして私があの世に逝けば、私にピンダ(お供えの団子)を供えてくれることだろう。かくして、〔息子を得た〕人々は、あの悪い世界(悪趣)における苦を見ずにすむ

のだ。」(二五・三)

◇ さて順調に時を経て、王妃は輝かしい男の子を産みました。その子の身体はあらゆる「偉人の」相好で飾られており、神々の子供たちと競うかのような容姿を持っていました。まるで「自分たちが宿る」特別な器を得たいと願う、多くの『王の徳性』たちから「その器となることを」期待されているかのような子でした。

息子が誕生したその時、子を切望していた、福德の心をもち大きな富財をもつダナ王に、その都城で、地の至る所から伏蔵（地下に隠された宝蔵）が、燦めく宝石の光線に輝きながら出現しました。（二五・四）

また海岸に住む王たちは様々な「誕生の」贈物を送りました。或る王たちは、燦めく澄んだ輝きを放つ沢山の宝石を、また別の王たちは澄んだ光沢のある真珠を山ほど、ダナ王に送りました。（二五・五）

その子の誕生時にダナ王には「かように」様々なかたちで富財が生じたので、「親族の」人たちは彼にスダナ（善財）という名を付けました。（二五・六）

◇ やがて或る時ダナ王は、スダナが学びを始めるべき時が来たことを理解して、教師たち——弓術学をよく知る者たち、国王統治学の説明に巧みな者たち、象の訓練や馬の目利きの術に詳しい者たち——のもとに、彼を入門させました。

遙か遠くまで進むことのできる、穴（欠陥）のない『輝かしい知性』の船に乗って、「速やかに」彼は『学問』の深い海の彼岸へと達しました。（二五・七）

「その頃」まるで『青春』という工芸家が苦心して制作した装飾品のような髭が、「彼の」顔の上にくっすら生えしました。（二五・八）

彼は欲望のままに、心の幸福感の依り処となる『性愛』（カーマ）にも任せましたが、しかし絶えずそれは『義務』（ダルマ）・『実利』（アルタ）との密接な繋がりがありました。まるで関係代名詞と代名詞の密接な繋がりの如く。（二五・九）

その彼の『心』という宮殿の内側に、『激質』（ラジャス）と『闇質』（タマス）は入り込めませんでした。あたかもそれは『純質』（サットヴァ）の門番が傲然と遠くから叱りつけたかのようなのでした。（二五・一〇）

◇ 時にかの王の五百人の大臣たちは、スダナが「王の適性としての」『人を惹きつける徳性』<sup>⑩</sup>を具えもっているのを見て、それぞれの息子に「次の様に」語りました。

「徳性を具えた方からお仕えすれば、そのことから生じた果が得られよう。果実を願う者が沢山の芽をもつ樹に毎日水をかけることによって「果を得る」ようなものだ。（二五・一一）

◇ それ故、お前たちはスダナ王子にお仕えしなさい。あの方が大地を支配する時、きつとお前たちは顧問官の地位を得ることだろう。」— 彼ら大臣の息子たちは「そういったします」と答えて、スダナに近侍しました。

彼ら大臣の息子たちは賢明な彼をどんな時でも「一時の」成功のために見捨てたりしませんでした。善き運命の人を、『義務』（法）と『実利』と『性愛』が相互に徳質の結束を固め、決して見捨てることのない如くに。（二

五・一二）

◇ さてダナ王の隣国にマヘーンドラセーナという王がいました。彼はその御しがたい横暴な性格のために自分の国を不当な苛税によって日々苦しめていました。

(a) 飢饉の難によって次第に生活用品と財と穀物の蓄積を使い果たし、(b) 飢えてすっかり痩せたために動く気力が身体から失われ、(c) ぼろぼろで垢じみた上下の衣を着けた、その国の住民たちは、(a) 力なく泣いている子供らがいる、(b) 火がずっと消えたままの竈がある、(c) 痩せこけた老いた牛が突き出ている草葺き屋根の草を口で引き抜こうとして家人に追い払われている、「そのような」それぞれの家を眺めて、激しい震撼の想い（絶望）を生じ、次の様に嘆きの言葉を発しました。「ああ、これはなんとこの酷い有様だろう。かつてこれらの家々では、祝祭を歓びながら紅花で染めた衣裳を着た女たちが、客人たちに食事をふるまっていたものだ。攪拌棒や杵の音が絶え間なく聞こ

え、捧げられた花々のある、薄茶色の牛糞が塗られた中庭があつて、肥えた仔牛たちが遊んでおり、夕方に牛の柵に坐っていると牛たちの群が反芻しながら動かし揺らすカウベルの快い音色が聞こえてきて、私たちを楽しませたものであつた。しかしまさにそのようであつた家々は、かの王の悪しき苛税によつてあらゆる富財を失つてしまつたのだ。それは誰の心に激しい震撼を生じさせないだろうか。

(a) 鍋に食べ物は何も無く、(b) 使用人たちは飢餓に苦しめられて糞れ果てており、(c) 夜中には灯明が無いため「扉の」入口の間に遮られて屋内に入らず、(d) 施しを求める人たちが家の戸口に訪れることも無く、(e) 祝い事も満足になしえない、ああ、「こんな」家は牢獄に等しく、その居住者にとつて悲しみでしかない。〔二五・一三〕

◇ 私たちはこう信じる、あれらの大臣たちも、これほど不法を恣にしているマヘンドラセーナ王にやむなく仕えているのだと。

〔王家に〕仕える人々というものは、たとえ王からの屈辱的な扱いによつて灰色に濁らされた日々の幸せであつても、「それを」欲するものだ。旅路の途中で喉が渴いた旅行者が、どこかの沙漠の中にいる時、泥水であろうと、水を飲もうとする〔のと同じだ〕。〔二五・一四〕

◇ 智慧の勝れた者たちが〔忠言して〕引き留めようとし続けているにもかかわらず、この王は悪道を行くのをやめようとしなない。人の本性というものはどうやっても抑えられないものだ。

余所から〔自分を〕非難する悪い評判が出て来て、暗愚の故に、ようやく後になって、それを消そうと躍起になるのが愚か者であり、〔すでに拡がった悪評を消そうとしても〕月面の汚いしみ(斑)を取り除こうと願うようなものだ。〔二五・一五〕

格別に尊い、賢善なる人々の定見を捨てて、感官を制御せずに悪の道を進む王を、人は遠く避けねばならない。それは旅人が不可触民の家の井戸を避けるようなものだ。〔二五・一六〕

◇ それ故、われらは不当な苛税に苦しめられるこの国を捨てて、法理の道に立つダナ王の領土内に行こう」と、そう言つて、死なずに残つてゐる牛の群を連れて、商品や家財道具を持った家長たちは、まるで安心できる父祖たちの住まいに赴くかのように、ダナ王の領土に移つて来ました。

その後マヘンドラセーナ王は、まるで羅刹のために荒れ果てたかのような自分の国を眺めて、大臣たちに言いました。「どうしてこの私の国は空っぽになつたのか。ダナ王の国はしかるに、なぜいつも豊作で楽しげなのか。」  
— 大臣たちは彼に言いました。

「もし乳しほりをする人が、雌牛から残り無く乳を搾つてしまふことをしなければ、彼は毎日仔牛に乳を飲ませてあげること出来るでしょう。\*王よ、それと同様に、もし収税を正しく保つならば、国土は衰えることなく、それは豊かになるのです。(二五・一七) ③

\* 王様、今はこの民を仔牛のように元氣にしてあげて下さい。もし大地というこの牝牛を〔酷く〕搾乳しないなら、それによつて、大いに昼夜なく盛んになつて、大地は如意樹の枝のように無数の果実をつけることでしょう。(二五・一八)

◇ \* 正しい道理から逸脱しない道を保つてゐるダナ王の国では、決して飢饉などの過患が出現することはありません。其処ではまたチトラという名の蛇の王(龍)が湖に住んでおり、その者の威力により、いつも衰える時がなく水の重荷に垂れ下がつた雲が、まるで友人たちであるかのように、その王の領土に穀物を実らせています」と、そう述べました。

\* マヘンドラセーナ王は答えました。「もしそうであるなら、私もそれをずっと久しく実行し、

\* あらゆる人民に七年間の無税を実施することによつて。だがチトラ龍の神力は此処に(この国に)どうすれば

生じるのか?」(二五・一九)

◇ \* 大臣たちは答えました。「閣下はこの事について、お心を乱しながら時を過ごされる必要はございません。私たちは或る策略をなし、それによってチトラが大王様の国に住することが実現するでしょう。」— そう、王に語ってから、大臣たちは自分の家に戻ると、その国中に毎日次のような布告を長い間し続けました。

\* 「誰か、あのチトラ蛇王を呪文の大威力により、ダナ王の都城に来るようにさせ得た者は、甚だ歎喜したマヘンドラセーナ王によって、友に等しい者として、黄金の箱が与えられるであろう。」〔二五・二〇〕

◇ \* 長い間言い続けられたその布告を耳にして、呪文の成就者である或る人物がやって来て、告げました。「黄金に満ちた箱を運んでこい。私が呪文の力により、一匹の象の如く、ナーガ(龍)の王チトラを捕獲繩(輪索)で縛って、連れてきてやろう。」— 大臣たちは黄金でいっぱい箱を運んで来ると、言いました。

\* 「達成困難な仕事をなし遂げたのを、誰かがもし目の当たりにしたとしても、人々は疑って、本当なのか、嘘ではないかと言うものです。」〔二五・二二〕

\* ですから私たちは黄金が満ちた箱を、気前よくお預けしましょう。あなたの〔捕らえた〕チトラが来た時に、これをあなたはお取りなさい。」〔二五・二三〕

◇ \* 「承知した」と彼は返事をして、ダナ王の国にやって来ると、自身に防御〔の呪法〕を施してから、チトラが住んでいるその湖を眺め、呪文によって十の方角の結縛を行いました。

\* 彼が急に、強力な呪文の結果を得るために、結縛された諸方角に心を集中すると、蛇毒をもつ下方を向いた多数の頸部のフードを有する者(チトラ龍)には、猛烈に頭が痛む病が生じました。」〔二五・二三〕

◇ \* その後蛇王チトラは顔を見られることなく、その湖から出て来て、(a) 岸辺の木の後ろに居る、(b) 数珠を繰って右手の親指と人差し指をさかんに動かしている、(c) 低く誦しているため唇が震動している、(d) 「発する」火花のため黄色い眼をもつ、(e) 完全に熟した果実の赤い先端の如き髪と黄色い髭をした、(f) とても瘡せた体の、(g) 怒っ



ていないのに怒っているように見える、(h) 婆羅門羅刹(死んで羅刹と化した婆羅門)の容姿に似た、(i) 明呪を誦唱している、その者(行者)を見て、恐怖心をもって思案しながら「岸边に」いました。

\* 「このヴィディヤ(明呪をもつ者・魔法使い)は<sup>(2)</sup>間違ひなく、真言の力で私を連れ去ることを欲している。そこで、誰に庇護を求めるべきか」と、そう彼(チトラ)は考え、一瞬の間に「周囲を」見渡すと、その湖とあまり遠くない所に、苦行によってひどく瘠せた体をした苦行者(苦行力の藏をもつ者)が居住しており、その苦行者のもとにパドマカという狩人が訪れては毎日供養をしていました。そこでかの龍は、明呪を唱えている彼(行者)を殺してくれる在家者たる人物として「その狩人を」考え、

\* 「明呪の成就から救ってくれるのは、あの王でもなく、あの苦行者でもない。だから私はすぐさま、矢をもつあの狩人のもとに行つて、懇願しよう」(と思ひました)。〔二五・二四〕

◇ \* その時、その狩人はかの牟尼(仙人)に対して、果(報酬)が無く「ても」、耳に快い言葉を語りながら、木葉で造つた庵の周囲に塗香を施して、自分の住まいに戻る途中でしたが、チトラは婆羅門の姿に化作すると、「狩人に」吉祥の言葉を述べて、向かい合つてこう言ひました。「若き人よ、今しばらく、少しお尋ねしたい。」その狩人もお辞儀して、「聖者よ、どうぞお尋ねください」と彼に答へました。チトラは語りました。

\* 「これら雨雲たちが、百の稲妻によつてあらゆる方角を照らしながら、ダナ王の国でまるで塗墨の山のように住しており、そのおかげで「国は」雨水が与えられています。〔二五・二五〕

\* あの王様は老人たちに奉仕することによつてその功德を得る方であり、正法に随う方であることは疑いありません。そのためこの国は飢饉の恐れが無く、常に花と果をつけた樹が繁茂するのです。〔二五・二六〕

\* 途切れることのない水流がある林の集まりによつて「地が」飾られており、また、別の場所には肥え太つた牛の群がいて、国を護るために適した正道が保たれているゆえ災禍が全く有りません。〔二五・二七〕

◇ \*パドマカは言いました。「聖者様が急にやって来られて、知らないのにこのように〔私に〕お尋ねになったのは、きつと何かの理由があるのでしょう。どうぞ聞いて下さい。この大きな湖にはチトラというナーガ〔龍〕の王が棲んでおり、その力によって、諸々の法門を照らすかのように〔光る〕稲妻がある、水の集積で重たくなった雲たちが、水晶棒のような澄んだ雨水を流すことによって、毎年あらゆる穀物〔の実り〕を成就させているのです。」

\*チトラは言いました。「もしあなたがそのとおりに〔すでに〕その話を知っているなら、それゆえ本当のことを私はあなたに語りたいのです。その蛇王チトラは〔今〕窮した状態に陥っており、それが〔他ならぬ〕私なのです。だからあなた自ら、私を救ってほしいのです」と言いました。するとその狩人は心底びっくりし、驚嘆してから、〔その龍に〕恭敬をなし、お辞儀して、こう語りました。

\*「かくも力ある蛇王よ、あなた様にとつての、その困難とはいかなるものでしょうか。輝く知性をもつ〔あなた様〕が、野生の生き物を殺すことに執着する者たる私に頼ることによって、どうして〔その困難を〕なくせるのでしょうか。」〔二五・二八〕<sup>33</sup>

◇ \*チトラは答えました。「あなたはあの者を見てください、――〔岸边の〕樹の後ろに立ち、真言を繰り返して唱えている、暴悪な眼をもつ、あの者です。あの者が明呪の力によって、私をこの湖の中から引きずり出し、ヘーンドラセーナ王の国に連れてゆこうと欲しているのです。

\*肩に勇健さをもつ者よ、あの者は供物の食物を供え、祈禱を誦すること、たちまち水面を揺らしています。太い腕をもつ者よ、どうか堅固な心で、あの者を鋭い牙をもつ野獣のように、毒矢をもって致命的急所を射貫いて下さい。」〔二五・二九〕

◇ \*狩人は答えました。「私たちの如き者であっても、その行為の達成をお約束いたしません。それ故、蛇王は安らかにあられて、自分の住まいにお帰り下さい。」――そこでチトラ龍は水の中の宮殿に入り、狩人は漁師〔獵師?〕の

小屋にきました。

\* 夜が過ぎて、夜明けの頃に彼が湖辺に行くと、明呪を誦しているその者を見つけました。その者が地面に両膝をつき、沐浴したばかりで沐浴衣を身に着け、からし種の粉を焼いているのを観察した後、かの〔狩人〕は樹々のある場所に居て、今しばらく様子を見ようとして、少しの間、明呪を誦するその者の真言の力でまさに本当に何か起きるのだろうか、いったい何者が蛇王を呼び寄せているのだろうかと考えながら、弓を曳きながら〔そこに〕とどまっています。

\* その時、波の泡という花環に覆われた、大きな輝きをもつ波たちは、揺れる蓮華の上の蜜蜂という二つの眼を回しながら恐怖しました。からし種を火の中に撒きながら、真言によって修法がなされる時、魚たちが回転するその水は怯えて、声すら発するかのようでした。〔二五・三〇〕

\* 清らかな湖水の中央からたちまち現れ、恐怖し、舌の先を震わせながら、女の髪に似た輝きをもつ蛇は、真言の明呪によって火の近くに呼び寄せられ、その者をもつ大きな水瓶に彼は〔引き入れられて〕住しました。

〔二五・三二〕

◇ \* するとその狩人は、限界量まで満ちた水の容器の中にチトラが住しているのを見て、「今の時を逸することは適切ではない」と考えて、

\* 眼のふちのあたりまで弓の弦を引いて、弓を放つと、目を少し泳がせたヴィディヤータは、彼の致命的な急所を鋭いやじりの矢によって貫かれました。〔二五・三三〕

\* 〔狩人は〕急いで近づいて、その者に「この蛇王を解き放て」と命じました。かの狩人が来たのを見て、その者はその蛇王を水器から放ちました。〔二五・三三〕

\* その後狩人は、赤みがかった色をした彼の頭を、怒りをもって、蛇の如く輝く剣で切断しました。光を発す

る火は、まるで狩人を恐怖をもつて見たかのように、消えました。(二五・三四)

◇ \* その時チトラ龍王は歓喜し、「彼の」無垢の宝石の発する光によって多数の頸のフードが光り輝くさまは、まるで燦めく光線に染まったサファイアの岩のようでした。その広い胸をもつ者は、まるで月の近隣の雲の如く近づいてきて、その狩人に多くの喜びを語りました。

\* 「私の」親族は地下におり、私のもとにいませんでした。それ故、すべてのこれらの事が起きずに済みましたのは、これはあなたのお力のゆえです。(二五・三五)

\* それ故、「われらが」親しい友となれますよう、水中の住まいに案内しましょう。多少の事(歓待)ですが、私はそれを私はあなたにしてさしあげたい。」(二五・三六)

◇ \* そのように言うと、その狩人の手を掴んで、下「の世界」へ入ってゆきました。その後その蛇王は彼に沢山の装飾品をつけさせて、毎日蛇の最高者に用いられる食物をもつて満足させ、享樂せしめました。その後或る時、

\* かの龍王が黄金製のウツパラ蓮をもつてアモーガ(必中)という投げ縄(輪索)<sup>34</sup>を祀り供養していると、狩人はその龍王に敬意を示しながら、それを眺めました。(二五・三七)

\* そして驚嘆して、それについて彼に質問しました。蛇王はそれに対して何かを捧げてから、彼は「これはアモーガの投げ縄です」と答えました。「敵に打ち勝つものであり、私は敬意をこめて供養しています。(二五・三八)

\* (a) 光を発し、(b) 「何でも狙ったものを」奪い取る、(c) 掌の中で稲妻の集まりのような姿をもつ、この投げ縄によって、私は恐怖に揺れる眼をもつ敵たちを、侮蔑をもつて、瞬時に引き寄せるのです。」(二五・三九)

\* 狩人は蛇に言いました。「私にとって財宝は少しも必要ありません。もし私が蛇王様の恩恵にあずかることが出来ますなら、帰ることを願う私に、この投げ縄をお与え下さい。」(二五・四〇)

\* 「偉大な友よ、この喜ばしい命をすらあなたに与えるでしょう。ましてこのアモーガの投げ縄を与えないこと

がありましたでしょうか。」—このように語って、歓喜心をいさぐ蛇王は財宝とともに、それを彼に与えました。(三

五・四二)

◇ \* 沢山の黄金・寶石・真珠とアモーガの投げ縄を手に持ったその狩人は、その蛇王によって自分の家へと導かれました。蛇王は再びその湖に帰ってゆき、その狩人はその投げ縄を高座に置くと、

\* 揺れ動き、さらさら輝いている蛇の皮のように恐ろしい〔それ〕に対して、薄いウシテイラ (USHI) の軟膏を塗布し、麝香鹿の葉をもって絵模様を描き、ビルヴァの樹の花を振り撒きました。(三五・四二)

◇ \* その後或る時そのパドマカは病のためにあの世に去りました。その息子としてウツパラという名の者がいて、彼は投げ縄のもつその偉大な性質を父から聞き知るを得て、そのような〔偉大な〕投げ縄を祀り供養しながら暮らしていました。或る時その狩人の息子は、蛇王の〔棲む〕清らかな水を湛える湖に着くと、かの仙人を喜心をもつて様々な仕方で長い時間奉仕していましたが、彼は龍王の清らかな湖の近くにいて、

\* 龍王の清らかな湖に近いその地での、歌を伴う妙なる琵琶の音によって、彼は〔心に〕はつきりとした欲望を得ました。(二五・四三)

◇ \* その後、ウツパラはその仙人に尋ねました。「聖者様、私たちの遊戯と笑いを伴った、琵琶の音と混じった歌の音が、どここの場所からか、聞こえてきました。どこから歌の音が聞こえたのでしょうか。」—牟尼は答えました。「ドウルマというキンナラ (人間に似た妖精的な種族) の王にマノーハラという名の娘がいて、その容姿と若さの美は、神々の娘たちをも恥じ入らせるほどだ。その彼女は五百の妹たちと一緒に、歌を歌いながら、祝祭日や月の変わり目の日 (満月など) に、水遊びを楽しむのです。」—狩人は尋ねました。「聖者様、私のような者が、驚異の力をもってそれらのキンナリー (キンナラ族の女) を支配下に置くのは、どうしたら可能なのでしょうか。」—牟尼は答えました。

\* 「大きく拡がり、堅固な性質をもつ、かのアモーガの投げ縄をもつ者なら、ヴァルナ神（水天）の如く、それで捕縛して、キンナリーを支配できよう。」〔二五・四四〕

◇ \* ウツパラはそれを聞くと、キンナリーを捕まえることに決意を固めました。「私にはアモーガの投げ縄があり、「キンナリーたちが」水遊びを楽しんでいる間、彼らが去らないうちに、マノーハラを投げ縄で捕まえてやるう」と考え、その仙人に丁寧に挨拶すると、「道の」熟練の故にすぐに家に戻りました。その投げ縄を掴み、龍王の湖の近くにやってくる時、樹々によって体を覆い隠し、そのキンナリーたちが水遊びを楽しんでいるのを見ました。

\* 花開いた蓮の如き目をもつ或る「キンナリー」は、波立つ水に入って、満開の蓮を楽しみましたが、その丸い目はまるで耳元から「挿した」蓮が落ちたかのようにでした。〔二五・四五〕

\* 或る「キンナリー」は大きな眼をそらして、急に顔を手で覆いながら、両手の合掌で「目に入る」水を止めたため、彼等を迎えようという願いを捨てました。〔二五・四六〕

\* 象の額の隆起のように「丸く」太った乳房においてまるで半円の月のような美しさの、輝かしい首輪をした牝牛は、美しい蓮の茂みを捨てて立ち去りました。〔二五・四七〕

\* 岸边では雄雌二匹のチャクラヴァーカ鳥が、嬌態ある者（「どうし」）の如く、或る場所で邂逅を願っていましたが、彼らは足を打つ湖水の風に揺り動かされたために、それが不可能に陥りました。〔二五・四八〕

\* 他の「キンナリー」たちは、水に入った時、手の先を後ろに振り動かして、「皆さん、私は水にずっと長い間入っていません、こんなふうには笑うのはやめてくださいな」と言いました。〔二五・四九〕

\* 他の「キンナリー」たちはいきなり、お互いに全身に水を振りかけあつて、笑い顔になりました。揺れながら燦めき輝く蓮をもつ蓮池の、或る場所では、蜜蜂たちが旋回していました。〔二五・五〇〕

\* 岸边で近くににいる他の「キンナリーたち」が、薄い蓮の花弁のようなピンクの指によって少し濡らしたので、

香りがよい、カッコー鳥の如く青い、髪の〔上に載せた〕葉が、鮮やかに美しくなりました。(二五・五二)

\* 月のように輝かしい蓮の花弁をもつ大きな睡蓮に覆われ、「女たちの」遊戯によって飾られた水面がある秋の湖において、稲妻のように光り輝いているキンナリーたちを、その狩人は不動のまま眺めていました。(二五・五二)

◇ \* 水遊びが終わる頃に、薄赤くなつた睡蓮の目をもつ「女たち」、蓮の花を嗅ぎながら、黒い髪房の先端から落下する水の滴りが蜜蜂のようによけてゆく大きな肥えた乳房をもつ「女たち」は、胸を疲労させながら、乳房の重荷のせいで「他の女たちを」嫉妬するかのようでした。

\* 前方に位置した侍者たちの掌に預けられた種々の装飾品に視線が止まっていた者(狩人)は、女友達らによって顔料と芳香が塗布された、生まれつき魅力的な女(マノーハラー)を見つけると、「確かに〔あれが〕キンナラー王の娘だ、そこで今すぐこれを捕らえよう」とかの狩人は考えて、ひどく押し合いへし合いをしている〔彼らの〕前に進んで、立ちました。キンナリーたちは彼を見て、ライオンに恐怖させられた雌鹿たちのように立ち上がり、すぐに装飾品と衣を掴んで虚空に去りましたが、その狩人はとても素早くマノーハラーに向かって投げ縄を抛り、

(a) 腰の所をその投げ縄に捕らえられた<sup>(3)</sup>、(b) 甚だ心を魅する四肢をもつかのマノーハラーは、狩人の心を奪いながら、閃く稲妻のように空の上で輝きました。(二五・五三)

◇ その投げ縄によって引つ張られながら、「空中で」逆立ちの状態となり、髪房からバクラ(ミサキノハナ)の花環が抜け落ち、また宝石の耳飾りやエーカーヴァリー(真珠の一重のネックレス)や金帯や腰の装飾品や上衣が〔次々に〕落下してゆき、あたかも天界の象が鼻で根こぎにした一本の如意樹が〔須弥山から〕落下するように、或いは、善業が尽きた天女が〔人界に〕落下するように、恐怖のあまり目を泳がせながら、彼女は空から落下しました。

彼ら〔他の〕キンナリーたちは、マノーハラーが卑しい人間の手に落ちたのを見て、「ああ、ああ」と口々に嘆きながら、大急ぎで〔国に〕戻りゆき、その父王にその出来事を報じました。また〔捕らえられた〕彼女自身も痛ま

しい嘆きの言葉を次のように発して呻きました。

「私の姉妹たちから、『あのマノーハラーが、或る人間の男によって、空を飛んでいる時に投げ縄によって捕らわれたのです』と、そう聞かされたら、わが父母は悲しみのあまりきつと意識を失ってしまうわ。(二五・五四)

ああ、どこにいるの、あの姉妹たちは。―お父様はどこ、お母様はどこ。そしてこの私はどこにいるの、他人の支配下に置かれてしまつて。ああ、運命よ、おんみはどうしてこの楽しい一家を引き裂いてしまったの。(三

五・五五)

きつと私のあのお母様は、『ああマノーハラー、愛しい娘よ、お前はどこに行つたのか。お前は人界の苦しみをどのように耐え忍んでいるのか』と、そう哀れに何度も嘆きながら、ずつと泣いておられることでしょう。」(三

五・五六)

◇ その時かの狩人は泣き続けている彼女に、「御婦人、泣くのはおよしなさい。あなたは何も怖れることはありません」と言いました。彼女は彼に答えました。「兄様、もし私に少しでも憐れみをお持ちなら、私を投げ縄の束縛から解放して、どなたか最も身分の高い人に与えて下さい。」―狩人は答えました。

「もし私がこの大きな投げ縄の拘束を解いてあげたら、きつとあなたは空に飛び上がって、自分の家に帰つてしまつてしまうでしょう?」(二五・五七)

◇ キンナリーは言いました。「決してそんなことは致しません。兄様、私を信じてください。」

この髻珠(チューダーマニ)の力で、私は空を飛べるのです。それ故、色鮮やかに燦めいているその髻珠をこの頭から取つてください。」(二五・五八)

そこで狩人によって丁重にその燦めく髻珠が取り去られました。不安げなドウルマ王の娘のその有様は、まるで月蝕によりたちまち月光という真つ白な笑いが取り去られた暗夜そのものの如くでした。(二五・五九)



◇ その後、かの「狩人」はこのように考えました。

「もし「王子の」スタナ様が、甚だ容姿が美しいこのキンナリーを、人から聞くか、目撃するかすれば、きつと私から力づくで奪ってゆくだろう。あたかも大きな怒りが「たちまち」忍辱の心を奪い取るが如く。(二五・六〇)そこで、「私の方から」そのスタナ様に、天界から落ちてきた天女のようなこの美しい眼をした娘を差し上げることにしよう。それで私は財宝を山ほどもらえるだろう。」(二五・六一)

◇ 狩人はこのように考えると、彼女に言いました。「ご婦人よ、悲しむのをやめなさい。この地にスタナという名の王子がおられますが、「その偉容は」神々の王子と競うかのようにであり、多数の徳性が依る器であられるお方です。私はその方にあなたを与えることにします。」— 彼女は涙のために言葉を詰まらせながら、「あなたが今知っているとおりにしなさい」と答え、途切れることなく流れ落ちる涙の滴りに頬を濡らして、「ああ、お母様、ああ、お父様」と、むせび泣きました。

さてスタナ王子は立派な車に乗って、数人の親しい人々に囲まれ、或る場所の園林を遊観していましたが、住まいに戻る途中で、かのキンナリーの悲泣の声を耳にして、「あれは誰か女が慟哭しているのか」と考え、次第に近づいてゆくと、「狩人」ウッパラカが手に入れたキンナリーを目撃しました。ウッパラカはスタナにお辞儀すると、説明しました。「王子様、マノーハラーという名の、

キンナラ王ドウルマの娘がこの者です。樹の生い茂る、チトラという龍の「棲む」湖で水遊びするのをやめて、  
〔この娘が〕 (二五・六一)

他のキンナリーたちと共に空に飛び上がったところを、私は雌鹿を「捕らえる」ように、アモーガ(必中)という投げ縄をもって捕獲したのです。(二五・六三)

私はよく思案した末、「この娘はあなた様にふさわしい」と考え、贈物として連れてまいったのです。それ故、

あなた様はこの娘をお受け取りください。(二五・六四)

黄金上にある宝石の細い棒、夜咲きの白睡蓮の上にある月光、そしてあなた様のもとにあるこの娘、——これら三つ〔の一对〕は素晴らしく美しいものと思われます。(二五・六五)

心を奪う美しい容をもつこの娘は、この摩尼宝珠の力によってたちまち空に飛翔します。それ故、この浄らかに澄んだ光を放つ宝珠をお受け取り下さい。——そこで王子は〔その髻珠を〕受け取りました。(二五・六六)

恥じらいのために少しうつむいているその女をよく眺めた途端、たちまち王子は、標的として急所を探していた愛神の〔恋の〕矢によって射貫かれてしまいました。(二五・六七)

まるで二匹の蜜蜂が睡蓮の上を覆って〔とまつて〕いる様を思わせる〔愛らしい〕両眼をもつ彼女が、愛神のごとき美貌のかの人(王子)をそつと眺めた時、素早く動いた花の矢をもつ神(愛神カーマ)のために、その細身の女は体に気怠さを感じて、惹起された悶えるような溜息をなんとか抑えたのでした。(二五・六八)

「ああ、美しさと威光において第二のカーマ神(花の矢をもつ神)であるこの王子が、もし私の夫になったなら、私はあらゆる女たちに勝る女となるでしょう。」——そんな思いが心を占めると、彼女はもう両親との別離が生んだ苦しみを気にしなくなりました。(二五・六九)

例えば、財を得たいと願っている人が、或る場所で伏蔵(埋蔵金)を見つけた場合、また異国を旅する者が苦境に陥っていて、〔たまたま〕親友を見つけたか、或いは知らない人であっても〔親切な〕尊い人を得た場合に、その者は、家族と遠く離れている苦しみを概して忘れてしまうものです。(二五・七〇)

スダナは彼女を受け取り、財を欲しがっているその狩人に沢山の財を与えました。願望どおりの果を獲得した後、彼は馬車の進行により装身具を絶えず揺らしながら、宮殿に赴きました。(二五・七一)

そしてスダナはキンナリーを得たその経緯を父母に報告しました。かの王はそのキンナリーが比類なき美貌を

もつを見て、まさに王子の結婚相手には彼女がふさわしいと語り、高く掲げられたはたばこ（幢）やのぼり（幡）をもつて、また塔門にくくりつけた花環によって、彼の都城をまるで神々の都のように極めて美しいものにした。た。

その後、様々な樹が春の花をつける頃、「冬中」ずっと眠っていたかのような愛神をコーキラ鳥がとても甘美な声で目覚めさせる頃、夜たちが未亡人たちのようにやせ細ってきた頃、或る吉日において、様々な婚姻のめたい儀式が王の宮殿において行われ、結婚の時刻が近づいたのを理解して、着付けに熟練した若い女たちが「花嫁の」キンナリーの飾り付けを開始しました。

或る女はよい香りのする花咲いたマンゴアの小枝を彼女の耳に挿しました。また別の女はケーサラ（ミサキノハナ）の花環の冠をいっぱいに満たす、巻き毛の芳しい髪をまとめあげました。（二五・七二）

また他の女は言い表しがたいほど美しい「花嫁の」四肢の上に、香り高い快い香油をゆつくりと塗りつけました。そして葉の装飾文様を描く化粧を、甚だ豊満で隙間がない両乳房に施しました。（二五・七三）

また別の女は、ほっそりした前腕と細く柔らかな指をもつ「花嫁の」両腕にブレスレットをつけました。そして心を魅する美しい胸飾りとして、寶石が中央に輝いている真珠の紐飾を結んであげました。（二五・七四）

まるで蓮についた露の滴りに似た、秘かに夫への愛を告げるものである、次々にこぼれる汗の滴りによって、彼女の容の上に「朱く描かれた」心を奪う美しさのヴィシエーシヤカ（額飾り）は何度つくり直しても、壊れてしまいました。（二五・七五）

王子は歓喜して、こうして化粧を終え、顔をうつむかせている、魅惑的な眼をしたかのドウルマの娘（マノーハラ）と、その蓮のような両手を握りしめて結婚しました。（二五・七六）

◇その後或る時、その「新婚の」時にふさわしい羞恥心により、まるで沈黙の行を行っているかのように見える

その妻に向かって、王子は人のいない所でこっそり好奇心から話しかけました。「華奢なひとよ、どうして私は今日も『あなた』の甘露のような言葉を恵まれなかったのでしょうか。あなたがこのように〔心を〕分かち合う気安さをもてないのはなぜでしょうか。

私の飛び回る『眼』という蜜蜂は、『齒の燦めく光』という花糸をもつあなたの『口』という蓮の花〔が開くのを〕を見たいと願っているのです。さあ可愛く微笑みなさい、怖がりのひとよ。」(二五・七七)

或る時、王子が寝たふりをしていると、彼女はその月のような美しさをもつ寝顔をずっと、まじまじと眺めていました。しかし不意に彼が両目を見開いたので、彼女は羞恥のあまりうつむいてしまい、王子は笑いました。

(二五・七八)

巻いた癖毛によって顔が飾られていて、微笑すると蕾のような齒の先が見える彼女は、まるで黒蜜蜂たちが満開の花の上にとまっている新生の蔓性のジャスミンの姿のようでした。(二五・七九)

こうして、神の都の女であるかのような、可憐な笑みをたたえた、心を魅する美しい彼女と一緒にいると、愛というものの絶妙さによって、王子は一年を一瞬のように思いました。(二五・八〇)

◇ さてある時、スゴートラとスヴラタという名の、無数の論書に精通した二人のバラモンが、アガステイヤ聖仙(カノープス星)が住する方角(南)から来て、国王が引見する時間に〔謁見場に〕入り、祝福を与えた後に座席に坐りましたが、二人とも論書を講じて〔学殖を示し〕、王を驚嘆させました。そこでかの王はスゴートラをプローヒタ(王室付き祭司長)の地位に就けました。またスタナはスヴラタを大臣の地位に就けました。

その後、時を経て、論書を講演する機会が生じた時、

スヴラタは様々な学者たちがいる会場で、軽蔑をもってスゴートラを辱めました。彼ら二人の心は忿怒によって濁り、あたかもマダ期(興奮期)にいる二匹の雄象のようでした。(二五・八二)

◇ その時スゴートラは考えをめぐらし、「あのスヴラタメは、スダナの庇護によって高慢になっているから、嘲罵の鋭い言葉の矢で毎日私を射つづけるのだ。だからなんとしてでも、スダナのほうだけは何らかの計略によってあの世に送ってやるう。あの王子はキンナリーへの愛情に甚だしく心が縛られている。だからキンナリーを亡き者にする計略を考えるのがよい」と考え、その邪悪な行為を思いつきました。

「かのマノーハラーを失えば、あのスダナはずっと悲しみを生じ続けて、死に至ることだろう。流れる川から切り離された魚が、ずつとのたうちまわって身体を痙攣させるように。」(二五・八二)

権力をもつ主が滅びれば、それに頼っている奴もただちに滅びるものだ。太陽の熱光で池水が干上がれば、睡蓮の繁殖が消え失せるように。」(二五・八三)

◇ 邪悪な心をもつ彼は、こうして、キンナリーを亡き者にするための策略をあれこれ思案しました。そのうちある時、国の辺境地に住むカールヴァティカという名の王がダナ王の命令に反抗しました。そこでダナはスダナ王子を呼んで、「王子よ、四種の軍隊(象・騎馬・車・歩兵)を率いて、カールヴァティカを帰順させよ」と命を下しました。

「かしこまりました」と言つて父に敬礼をなした後、スダナはマノーハラーのかの髻珠を持って母親の許に行き、お辞儀して次のように言いました。「母上、私はしばらくの間、カールヴァティカ王との間で講和か戦争かの交渉をすることにします。この髻珠は、マノーハラーがその力により空を飛行することが出来るものです。母上はどうかこれを秘かに預かって下さい。もし何か、マノーハラーの命にかかわる緊急の事が起こりましたら、その時、この髻珠を彼女に渡してあげてください。」そう言つて、その髻珠を母の手に預けると、自分の住まいに戻り、眼を涙でいっぱいにしたキンナリーに別れの言葉を述べて、抱きしめました。それから、見事な戦車に乗り、軍隊に包まれて、自分の宮殿から旅立つてゆきました。

その時のマノーハラーは大きな窓に立ったまま、滂沱と流れる涙によつてその容を洗いながら、悲しい視線を動かさずに、「車上の」スダナをいつまでも見つめていました。(二五・八四)

王子は、悲しさになんとか「車から」後ろを振り返つて、まるで黄金で出来た「女神像の」似姿のように立っている彼女の、涙の雫をこぼしているその姿を、ずっと見つめていました。(二五・八五)

スダナが視界から遙か遠くに離れ去ってしまった後、そのキンナリーは『別離』という矢に打たれ、切ない思いにひどく心を乱して、静かにベッドの上に倒れ込みました。(二五・八六)

愛しい人との別れの時には、再会の希望こそがその落ち込もうとする心を支えてくれるものです。炎熱の時に、一筋の川の流れが、ひどく渴して旅の疲労に苦しむ人を支えてくれるように。(二五・八七)

「さあ、あなた、落ち込むのはおやめなさい。敵をやっつけて、目的を達したら、あなたの愛しい人はまた戻ってきますよ」と、そのように、友人として付き添う女たちの一団は、目を涙で濡らした容の彼女をずっといつまでも励まし続けました。(二五・八八)

◇ 親しい女たちが彼女の涙を湛えた蓮の眼を手で拭いてあげると、長い溜息を吐くことで少し「その吐息の微風に」扇がれている歯がまるで宝珠のように放つ輝きに照らされた満月のような容をもつ彼女は、スダナとの別離の苦しみに耐えられなかったものの、なんとか自分を保っていました。時が過ぎ去つてゆく間、清い水で洗つて「無造作に」粗くひつつめ髪にした彼女は、吉祥紐(結婚の標たる紐)だけを首に懸け、頬の上に垂れてきた髪の毛を、幾度も耳の後ろにたくし込んでいました。

女は愛しい人と別れている日数を記憶するため、地面に赤銅色の爪で「日々」線を刻んでいましたが、首飾りの真珠のように数珠つながりになって「落ちる」燦めく涙が、震えている「彼女の」反った睫毛の先端から分離するたびに、その線が滲んでしまうのでした。(二五・八九)

◇ さてスダナが、城塞に立て籠もったかのカールヴァティカと、和平か戦争かで交渉しているうちに、ほぼ一年弱の時間が過ぎました。そして或る時、ダナ王は夜明けに起床すると、秘かにプローヒタ（宮廷祭官の婆羅門、スゴートラ）を呼んで、見た夢を次の様に打ち明けました。

「ああなんと、夢の中で敵どもが私の腹を断ち割り、その内蔵でこの都城がぐるりと包まれたのだ。その夢の果（予知夢の実現）は何になるのか。一切智の如き方よ、あなたは余さずすべてを説明してほしい。」（二五・九〇）

◇ その時「しめた。策略の機を得た。この王は不快な夢を見たのだ。キンナリーを亡き者にするために私は偽りの説明をしてやろう」と、プローヒタはそう考え、この悪人は王に次の様に語りました。「閣下、その夢の果はよくないものであると私は見ます。

王よ、天界から神が落ちるように、あなた様には三箇月のうちに死があり、あるいは、偉大な王位からの失墜があるでしょう。」（二五・九一）

◇ するとその王は死を恐怖し、そのプローヒタに問いました。「それでも、私が非時の死によってあの世に行くことなく、また王位から失墜しないですむ何らかの方法が無いのだろうか。」——プローヒタは答えました。「方法が一つあります。閣下がもしそれを実行できるでしたら、ですが。」——王は答えました。

「どれほど苦しみに苛まれようと、私はずっと生きていたい。権力をもち、あらゆる願望を実現する者でいたいのだ。まして、ずっと変わらぬ幸せについては、言うまでもない。」（二五・九二）

◇ それ故、私は自分の命のためなら、どんな難行でもなすつもりだ。師よ、お話し下さい。」——プローヒタは言いました。「そうであれば、大王よ、お聞き下さい。

供犠においては、犠牲獣の血で満たした大きな池にお降りになられ、次に婆羅門たちに布施をお与えになり、

◇ そしてご自身で、キンナリーの脂肪を火中にお捧げになられねばなりません。そのことによって、この王権を守りながらあなた様は長生きなさるでしょう。」(二五・九四)

◇ 王は尋ねました。

「聖人よ、祭儀の実施は難しいことはありませんが、この場合、キンナリーの脂肪の出所はどこですか？」(二五・九五)

◇ プローヒタは答えました。「その出所はとて身近にあります。……が、閣下はどうしてそんなに驚かれるのですか。

閣下、スダナ殿はまさにあのキンナリーを御令室としてお持ちです。三聖火の祭儀において、しかるべき儀式を伴って、彼女は屠られるべきです。」(二五・九六)

◇ 王は答えました。「これは実行が難しいと私を見る。なぜなら、

スダナの生命はあのキンナリーを依り処にしており、もし彼女を亡き者にすれば、私の息子は命を捨てるに違いない。」(二五・九七)

◇ プローヒタは言いました。

「息子も、妻も、莫大な富も、—これらはすべて、王たちにとっては自身を守るために存在しているのです。(二五・九八)

お命さえあれば、あなた様の徳性ある息子たちはまた別に生まれてくることでしょう。この世で(どんなに)寵愛した者でも、死んだ人に随い来ることはないのです。」(二五・九九)

生きていれば、世界におけるあらゆる快樂を楽しみ、綺麗なものを見、様々な話を聞き、来世の種子となりうるあれこれの善行をなすことも出来るのですから、それ故、聡明な知性により、あなた様はご自分をお守りに



なるべきです。」〔二五・一〇〇〕

◇ その時の王は、「先生は正しくお語りになられました。それでは供儀の実施にとりかかって下さい」と言いました。するとかの極悪人は「しめしめ。スダナを滅ぼすこの策が上手くいった」と考え、自分の家に戻って、供儀の実施の準備を始めました。

キンナリーを亡き者にするというその事を、王妃は〔部屋の〕入口のカーテンの後ろに隠れて耳にしてしまい、眼に涙を浮かべ、秘かにキンナリーを招き入れて、語りました。

「愛しい子よ、此処で供儀が実行される時が来れば、あなたはプローヒタによって王様のために生け贄にされてしまいます。そうなる前に、この髻珠を頭に結び、空を飛んであなたはお父上の家に戻りなさい。〔二五・一〇二〕あなたが生きてさえいれば、私もずっとスダナが生きているのを見られるでしょう。もしあなたが死んでしまつたら、どうして私は〔生きた〕息子を見られるでしょうか。」〔二五・一〇二〕

この王妃の言葉を聞くと、マノーハラーは恐怖に目を動転させ、矢に射られた雌鹿のように身を震わせました。

〔二五・一〇三〕

◇ その時王妃は髻珠を〔頭に〕結んであげてから、再びキンナリーに言いました。「供儀の場にいる王様にあなたのご自分の姿を見せ、それからお父上の宮殿へと〔飛んで〕去りなさい。そのようにすれば、私は〔逃がした〕咎めを受けないでしょう。」―「そういたします」と彼女は答え、眼に涙を浮かべて王妃にお辞儀をした後、間もなく落ち着かない様子で到着した王の侍者たちによって取り囲まれて、「王宮を」出て、供儀に向かつて出発しました。「ああ王子に再びお会いできたら」と考えながら、真珠のネックレスの数珠つなりの有様に似て途絶えることなく零した涙の滴りによって彼女は黄金の蓮の蕾にかたが似た両乳房を濡らしました。彼女がこちらにやって来たのを見て、スダナの侍者たちは涙を浮かべ、そつと静かに次のような言葉を交わしました。

「シリィシャ(アカシヤ)のように華奢でほっそりとした体の、うら若いお方、一死ななければならぬと思つて眼に絶えず涙を溢れさせ、供犠の祭官たちにその身が生け贄にされようとして震えているあのお方を、いたい誰が見ることに堪えられようか。(二五・一〇四)

ああ、(a)群から迷い出た子鹿のように眼を落ちつきなく動かし、(b)本性上怖がりで、(c)恐怖に襲われ声を震わせている、こんなお方に対して、自分の益のためにその殺害を望みさえする王たちとは、なんと冷酷な心をもっていることだろう。」(二五・一〇五)

◇ その時のプローヒタはキンナリーがこちらにやってくるのを眺めて、「あのキンナリーが到着しました。大王様は血のプールの中にお浸かり下さい」と言いました。「そうしよう」とかの王は返事をして立ち上がりました。するとそのキンナリーは空中に飛び上がり、こう独り言を言いました。

「私はこのまま生きていて、誰に対してもやさしいあのスダナに再び会いたい。だから、さあ、王宮を捨てて、お父様の宮殿へ戻りましょう。」(二五・一〇六)

◇ そう自分に語って、彼女は風の道により実家に帰ると、「その姿を見て」「これは何か。いったい幻なのか、本当にあの、わが娘なのか」と考えながら溢れ出た歎びの涙の滴りで睫毛を濡らす

かの父を、母を、キンナリーはたちまち抱きしめました。そしてまた、そして微笑みによって美しい齒の並びの輝きを見せる心悅ぶ彼女の姉妹たちも。(二五・一〇七)

◇ そして彼女は母に、自分に起こったその出来事をすべて順々に話して聞かせました。

一方「祭事場では」ダナ王は「これは一体どうしたことなのか」と、うつむいたまま考え込んでいました。かの邪悪な心のプローヒタは王に近づき、次のように話しました。

「彼女は(a)赤茶色の髭を生やし、(b)黄色い眼から火花を放っている、或る婆羅門羅刹(悪業により鬼に生まれ

変わった婆羅門)によつて、まるで虎が雌鹿を襲つたかのように、どこかに掠られていつてしまったのです。(三・一〇八)

そこで、(a)ヴェエダで規定されている、(b)「禍を」鎮める因となる、別の行法により、あなた様を長生きさせることにします。どうかご懸念をお捨て下さい。(二五・一〇九)

◇「そうしよう」と王は答えて、婆羅門たちに布施を与え、プローヒタと共に自分の住まいに帰りました。その後、そのプローヒタはこのように考えました。「結局はキンナリーの屠殺が無くなつても、王子を亡き者にする方策はもう達成されている。なぜなら、

あのキンナリーが豪華な住まいを捨てて何処かへ立ち去つたと聞けば、スタナは必ず生を放棄するに違いない。

(二五・一一〇)

スタナが死んでしまえば、わしはあの忌々しいスヴラタメを、大臣の地位から追い落としてやろう。激流が一本の樹を岸辺から押し流すように。(二五・一一一)

◇ さてその頃、(a)スタナとの別離の苦しみのためほつそりした体は青白く、(b)くまができた頬の上に垂れ落ちた巻き毛の先端が乱れたままの、マノーハラは、「いったい私はまた王子にお会いできるのだろうか、それとももう……」と思案に耽つて、浮かぶ涙の雫でその両乳房を濡らしていましたが、「私がいなくては、きっと王子もあの地で何にも欲びを得られないことでしょう。だから、彼がここへ来れるように、その道を示す一枚の書き置きと、葉草スターを持って、かの大仙のもとに行つてみよう」と、そう思いつくと、ただちに空に飛び上がり、かの仙人の所に到着すると、彼に挨拶をして、一隅に坐り、こう話しました。

「偉大な仙人様、罪なく哀れなこの私を狩人に捕獲させて絶望させたあなた様ですが、ああ、しかし憐れみ深く、寂靜の道に専念して大きな苦行の果を得られたお方です。(二五・一一二)

◆ あなた様が再び、「ドウルマの娘であるあのキンナリーが来た」と、狩人に私への猟をお任せにならないうちに、憐れみの心をもつあなた様に小事をお知らせして、速やかに私は風の道により立ち去ります。」(二五・二二三)  
聖者は言いました。「ご婦人、どうか、そのように私に疑念をいだかないでほしい。

◆ あの狩人が偉大な投げ縄であるアモーガを持っているとは知らなかったのです、私はあの時、あなたについて正直に、ありのまま話してしまつたのです。(二五・二一四)

◆ 迫害する者に対しても憎悪をもたない私が、ましてどうしてあなたに対して、それをもつでしようか。私の無知が引き起こしてしまつた害悪を、マノーハラーよ、どうか赦して下さい。」(二五・二一五)  
◆ するとかのキンナリーは、その仙人に頭を下げ、言いました。

「あなた様の心を苦しめるような厳しい言葉を私は語ってしまいましたが、どうか私の「言った」その一切を、泰然たるお心をもって、お赦して下さい。(二五・二一六)

◆ 聖者様、これが「旅の行路の」書き置きで、これが偉大な薬草スターです。そしてこの指輪も、あの勝れた心の人(王子)にお渡し下さい。(二五・二一七)

◆ そして私からの伝言として、あなた様は彼にこうお伝え下さい、――『飢え・喉の渴き・疲労を癒やすにはこのスダーを入れて煮たギーを「薬に」用いて、この一枚の書き置きを見ながら、キンナラ王ドウルマの館まで来て下さい、』と。

◆ また、『あなたに手だて(方便)と不屈の努力(精進)と大きな私への愛があるなら、別離に憔悴している私に会うため、どうして来られないことがあるでしょうか』、と。(二五・二一八)

◆ 偉大な仙人様、

◆ 尊者たちの前で(「かように」)女たちが夫に関して話をするのは、作法に適ったことではございませんが、

しかし「今は」なすべき事の重大さが私の羞恥心を却けてしまっておりす。」〔二五・二一九〕

◇ 聖者は言いました。「あなたは心安らかにありなさい。すべてのあなたのこの伝言を、私はスタナに伝えます。」  
—そこでかのキンナリーはその仙人に丁重に挨拶をしてから、空に飛び上がって、父の館に戻りました。彼女が去った後、ほどなくして、

スタナはかの王を武力によって打ち負かし、勝利しました。偉大な心の人である彼は、『徳性』という財をもつ者として、その王から財（賠償金）を取って、彼に自身の領地を与えてから、その日が過ぎる頃、栄光ある父王の都城に帰着しました。〔二五・二二〇〕

「ドゥルマの娘に私はもうすぐ会える、まるで新月の如く、白くほっそりした体をして、自らの美しさに輝いている彼女に。」—そう、『願望』という絵筆によって（「心中に」）彼女を描きながら、熱望をいだいて彼は幾度も繰り返すように思っていました。〔二五・二二二〕

「私は背後からそっと近づいて、彼女の両目を両掌で覆うのだ。：と、そんなふうには邂逅をわくわくと待望していた私は今日、歓びのあまり、一日が過ぎ去ってしまったのも気づかなかった。」〔二五・二二三〕

◇ その時ダナ王は勝利を獲得したスタナが都城の近くまで来たことを聞いて、このように考えました。「キンナリーを欺いたあのことについては、すぐにはスタナに話さないほうがよい。聞けば彼はそのうち自殺してしまうかもしれない。」—そう考えると、門衛に命じました。「行って、スタナに次の様に伝えなさい。

わが息子よ、占星術師の命じるところに従い、今晚は園林で過ごしなさい。そして吉日である明日に宮殿に入りなさい、と。」〔二五・二三三〕

◇ その門衛は王の命令を受けてスタナのもとにやって来ると、その通りに伝えました。スタナは「了解した」と答え、園林に入りましたが、寝台に横たわりながら、マノーハラーと離ればなれになっていることにひどく困惑し、

眠りに入ることが出来ずに、次の様に考えました。

今夜、この眠りはまるで激怒している一人の女のように、「明日の再会を」熱望する私の両眼をちつとも閉じさせてくれない。あのひともきつと「私と」同様に、今夜は幾人かの女友達と一緒におしゃべりしながら一晩中(三更の時を)「眠れずに」過ごしていることだろう。(二五・二四)

◇ 次の日になり、彼は宮殿に入って、両親を跪拝し、自分の寝室がある住居に戻ってきて、寝台に坐すと、門衛の女に伝言を頼みました。「君、どうか行って、私の次の言葉をマノーハラーに伝えてくれ。

「愛しいひと、「長い」別離によって恋い焦がれた心をもつ、この私のそばに来ないのはなぜ？ああ内気なひとよ、あなたは今日になっても、深く習い性になっている、女子に相応しいその『羞恥の心』をかかえているのですか」と。(二五・二五)

◇ するとその門衛の女は、「いったい、行って私がそのようにお伝えすることが出来るマノーハラーがどこにいるというのでしょうか」と考え、悲しみのあまり、溢れた涙で目を曇らせました。すると恐怖心をいだいたスダナはその女門衛に尋ねました。

「私は思慕の心で、『行ってあの華奢なひとに伝えてくれ』と言ったのです。ご婦人よ、涙で目を曇らせたそのあなたの顔はどうしてなのですか。(二五・二六)

あなたの涙はもしかして、愛しいあのひとが死の国に去ったと告げるものでしょうか。私のこの心はひどく動揺し、同時に「恐ろしい」疑念につかまれています。」(二五・二七)

◇ そしてスダナは急いで立ち上がり、母のところに行くくと、質問しました。「母上、マノーハラーは一体どこにいるのでしょうか。」— その時王妃は、この人に対してずっとこうしてごまかし続けることはとても出来ないかと判断し、キンナリーと別れることになったその出来事を秘かにすべてスダナに話しました。

王妃のその言葉を聞くと、「マノーハラー、お前はどこに行った」と呻きながら、落雷に打たれた山頂が崩れ落ちるように、スタナは悶絶して地に崩れ落ちました。(二五・二二八)

◇ 久しい後によくやく意識を取り戻した彼は、王妃が泣きながら見つめる中、起き上がって、腕や衣を持って支えようとする自分の従者たちを振り払って遠ざけると、太陽が『日没山』（西の地平線）に沈みゆく頃、あれこれの語を叫び散らしながら半狂乱の状態になって自分の住まいから出奔し、「ああ、マノーハラーよ、私を捨ててお前はどこに行った」と呻きながらあちこちの山々、森の奥を彷徨い歩きました。

その後かの王妃は、「失踪した」スタナとの離別の苦の焰に心が焼かれ、次のようにあれこれの嘆きの言葉を発しました。

「わが息子が、『ああ華奢な体のマノーハラーよ、私を捨ててお前はどこに行った』と嘆きながら〔歩いて〕いるうち、夜中に穴に落ちてしまわないだろうか。(二五・二二九)

毒蛇に咬まれたりしないだろうか。虎の餌食にならないだろうか。残忍な盗賊たちに装飾品を奪われてから殺されたりしないだろうか。(二五・二三〇)

ああ私の、深く根を張った、このような愛の苦しさを。―これを持っているから、愛する人たちから離断されてしまうと、ついつい大変な災い事を予想してしまうのだろう。(二五・二三一)

ああ母なる夜よ、星々という花々をもって天空に敬意をお示しになるあなたは、どこかの地で横臥しているわが息子をどうか、お守り下さい。(二五・二三二)

ああ月と太陽よ、夜と昼の灯明たる者よ、夜咲きと昼咲きの睡蓮を目覚めさせる者たちよ、どこかを彷徨い歩いているわが息子を、どうかお守り下さい。(二五・二三三)

森の精霊よ、どうか、蓮の花びらのような眼をしたあのわが息子を、坐っている時も、歩いている時も、眠つ

ている時も、林の中でお守り下さい。(二五・一三四)

親しいわが友、善き娘よ、どうかあのスタナが歩みゆく時、眼を逸らさずに見て下さい。彼を眺めていれば、あなたは十分に眼福にあずかるのですから。(二五・一三五)

ああ、まるでカーマ神をまのあたりにするかのような、眼にとつての祝祭である「美貌の」あの子の、いつか伴侶になる女性は、とても幸運なひとです。(二五・一三六)

ああ、あらゆる美しい男たちから「美の」優勝旗を奪い取るあの子によって、この大地の円盤は荘厳されています。まるで一個の宝石によって黄金の板が荘厳されるように。(二五・一三七)

最高の天運に恵まれた、大きな目のあの子を私が眺める間、親しいわが友よ、私の視線の邪魔になる一匹の蜜蜂を追い払って下さいませんか。(二五・一三八)

〔親しい友よ〕、あなた一人でこの大きな窓を塞いでしまつては、栄光ある人たち(將軍など)の先頭を進みつつあるあの子を、わたしはどうやって見たらよいのでしょうか。(二五・一三九)

親しい友よ、英雄たるわが王子を〔独り占めして〕自分だけで見たいと願っているあなたのこの凝視は、他の人と分かち合うという良い品性を持っていないようですね。(二五・一四〇)

こうやって、かつて都の女たちが憧憬をもつて長い間大きな眼を動かさずにじっと見つめていた、私のあの愛しい子は今や、山林の中を彷徨つていて、雌鹿たちに怖れをもつて一瞬だけ見つめられている。(二五・一四一)

今日、あの愛しいわが子は、とても綺麗で柘榴の粒のように紅い爪の輝きに飾られた足指がある繊細な両足を、〔痛い〕ダルヴァ草のある地にどうやって降ろせるだろうか。(二五・一四二)

かつて、私のあの子は(a)よい香りのする、(b)新鮮な青睡蓮が添えられてとても美しい、(c)宝石の器の中に注がれたワインを飲んでいたので、今、彷徨い歩いていて喉が渴いた時に、掌で生ぬるい水を飲むことがどうし



て出来るだろうか。(二五・一四三)

(a)高貴な家柄に生まれ、(b)ものを乞うことを学んだことが無く、(c)布施することのみ熱心で、(d)常に安樂であったあの子が、飢餓にやつれ、青白い体をして、どうやって「お恵み下さい」と他人に言うことが出来るだろうか。(二五・一四四)

沢山の願いを伴い、ずっと長い間息子を得たいと欲して、渴した心を抱いていたこの私に、ああ運命の神よ、あなたはあの子という一掬いの『不死の甘露』(アムリタ)を与えてくださったのに、今さらなぜ奪うのですか、ああ無慈悲なる者よ。(二五・一四五)

もし誰かがここで今日、『あの困苦したお人はこちらの方角へ行きましたよ』と指し示してくれたなら、あの子の美しい足跡に飾られた径を、私はずっと辿つてゆけるでしょうに。(二五・一四六)

〔わが子よ〕、お前は憐れみ深く、百の苦しみに苛まれて悲しんでいる人がいれば、たとえ敵であっても憐れみをかけていたのに、ああどうして、よき息子よ、泣き嘆いている善き母であるこの私のもとに、お前はやって来て慰めてくれないのか。(二五・一四七)

ああマノーハラー、キンナラ王の娘よ、あなたはどのようにしてこんなに無情になれるのか。〔あなたを〕恋しがって、こうしてたった独りで彷徨っている私の息子のもとに今行つて、安心を与えてあげないなんて。(二五・一四八)

—このようにスタナと離ればなれになったことに落胆して、赤い眼をして涙を絶えることなく湛えているかの〔王妃〕を、王はしばらく涙で視界を失いながら、なんとか慰めようと思いました。(二五・一四九)

◇ さてその後、キンナリーとの別離によって心の狂乱を起こしたスタナは、山林の中を歩きまわつて、どんな鳥や動物でも見かけるたびに、それらに質問をするのでした。或る時彼は、花咲いたパラーシャ(ハナモツヤクノキ)の

樹上に止まつて伴侶の雌の鸚鵡とおしゃべりをしていた鸚鵡にむかつて、次の様に尋ねました。

「君、キンシユカ（ハナモツヤクノキ）の樹の上にいる鸚鵡よ、満開の綺麗なシリーシャ（アカシア）の頭冠そつくりの鳥よ、咲いたばかりのアショーカの花びらのような赤い足指をもつ鳥よ、君は私の愛するひとを森で見なかつたかい。」（二五・一五〇）

◇ おや、君はどうやら連れれの雌鳥としゃべってばかりで、ちつとも私の言葉を聞いていないね。さよなら、君、お達者で。……じゃあ今度は、(a) サファイアが入り混じったエメラルドの集積そつくりの尾羽をもつ、(b) 新鮮なクムダ蓮のように目のきわが真つ白い、(c) 平岩の上に止まつている、あちらの孔雀に尋ねてみよう。

君、よき孔雀よ、山の頂に王冠のようにいる鳥よ、最初の黒雲がやって来る時の「孔雀たちの」ダンスの舞台監督たる者よ、君はこの稠林の中で、さ迷っている私の愛しいひとを今日見なかつたかい。」（二五・一五二）

◇ おやどうして君は黙っているんだい。まったく礼儀が欠けているね、君は。しかし君を責めるべきではないかもしれない。なぜなら、

君が「こうして」山の岩の上に坐つたまま、両眼を動かさず、禪定に入つた人物のように全身微動だにせずじつとしてゐるのは、きつと君も孔雀の女から振られたのではないかい。私があゝ華奢なキンナラの王女に捨てられたように。」（二五・一五三）

◇ それなら愛する女を失つた者をうるさく煩わせるのはよくないことだ。……じゃあ今度は、あの、(a) マノーハラーによく似た目をした、(b) 反芻に口先を動かしている、(c) 柔らかな緑の草地に坐つていると大地の一つの眼のように見える<sup>(96)</sup>、白斑のある黒鹿に尋ねてみよう。

君、鹿の王よ、私の美しいひとに似た眼をもつ者よ、ジャスミンのように白い腹部をもつ者よ、君は今日ここで、森を彷徨っている時、ドウルマ王の娘を見かけませんでしたか。」（二五・一五三）

◇ おや、どうして、君も立ち上がって、愛しいひとの報せをなにも語らずに、さっさと行ってしまう。まあいい、君は去りなさい。妻と落ち合つて、一緒にいなさい。私がキンナリーとの別れによつて味わつたような、こんな心の有様を決して味わわないう祈るよ。……じゃあ今度は、この、(a) 沢山の樹の蔓の花々にある蜜に夢中になつてゐる、(b) 私の愛しいひとの眼の瞳の黒さをもつ、蜜蜂に尋ねてみよう。

君、よき蜜蜂よ、ああ花開いてゐる蓮池の美女―睡蓮たちの、その容の上で、まるで揺れ動く髪のを演じてゐるかのような蜂よ。君はここ、山林中のどこかで、華奢な体をもつマノーハラーを見かけませんでしたか。

(二五・一五四)

◇ おや、どうして、君も返事をしませんね。『蔓草』の女たちによつて供された、自身の『花』の器に置かれた蜜を、その花汁で顔を黄色く染めながら飲み始めましたね。まったく思いやりがないのですか、君は。私が愛するひとと別れて心苦しんでいるのに、ただ花の蜜を飲むことばかり願つてゐるなんて。

この蜂が、幾度も池の蓮たちの中に赴いては、すぐまた蔓草の沢山の花たちのもとへ戻つてくるばかりで、ちつとも返事をしないのは、きつと蜂の女との別れを味わつたことがないからですな。(二五・一五五)

この世でかつてわすかでも「別れの」苦しみを経験した者なら、「他人の」ひどい苦しみを知る時に、苦惱するものです。(二五・一五六)

◇ 尋ねられても何ら憐れみを示さない、この嫌な蜜蜂は放つておきましょう。……じゃあ今度は、砂州上にいる、河(という女の)額の装飾印のような、このチャクラヴァーカ鳥に尋ねてみよう。

君、チャクラヴァーカよ、君は睡蓮の花びらのような眼をした、ほっそり瘠せて、愛らしい頬笑みのあるマノーハラーを見なかつたかい。(二五・一五七)

君も、夜が来たというのに、妻のチャクラヴァーカ鳥とはぐれてしまつたのかい。このように自分でも「女と

の離別の」苦しみを知っているのに、どうして「私に」黙ったままでいるんだい。(三五・一五八)

◇ マノーハラーを私は見ました、とか、見ませんでした、とか、それだけ語るだけなのに、それすら語ろうとしないなんて、この嫌なチャクラヴァーカには何とがっかりさせられるか。もう何度も尋ねたので、この者は放っておこう。：：じゃあ今度は、この、(a)輝く剣のような紺青の膚の色をもつ、(b)半分とぐろを巻いた体をその蟻塚の外に出している、一匹の蛇に尋ねてみよう。

君、蛇よ、『死』の弓の矢であり、シヴァの飾りである者、燦めく紺青のウツバラ蓮の花環そっくりの者、舌の先端をひらめかせている者よ、君は彷徨っている私の愛するひとを今日見ませんでしたか。(三五・一五九)

◇ おや、どうして、この者も、怒ってシューという音を発しながら、頸部のフードを少し拡げて、再び蟻塚に入つてゆく。

どうして君は、蛇よ、こうやって尋ねたら、理由もなく私にむかつて怒るんだい。蛇の毒よりも、愛する者との別れから生ずる苦しみのほうが、ずっと致命的というのに。(三五・一六〇)

◇ しかしそもそも、生まれつき知性の乏しい、これらの哀れな動物たちが、私の愛しいひとを認識できるものだろうか。：：じゃあ今度は、あらゆる生類にとっての灯りである偉大な方、お日様に、マノーハラーの消息を尋ねてみよう。

もしもし、太陽の神よ、夜の闇を打ち破る者、世界の唯一の眼たる者、あなたは私と別れて憔悴しているマノーハラーを見ませんでしたか。(三五・一六一)

◇ どうしてでしょう、このお方も急いで地平線に行つて「沈んで」しまわれた。：：じゃあ今度は、(a)夜咲きの睡蓮たちの友であり、(b)いま水面に昇りつつある、(c)インドラ神の象(アイラーヴァタ)の額の隆起部のように「まんまるの姿で」出現された、お月様に尋ねてみよう。—もしもし、神様、『夜』という女の額飾りたるお方、

月の神よ、あなたはここで月のように魅力的で、私との離別によつて瘠せ細つた体の女、マノーハラーを見ませんでしたか。(二五・一六二)

ああ、星々(という女たち)の後宮の中にいて、王としての遊びに没頭しているあなたは、軽蔑心すらおもちになつて、冷たい光線を放ち、苦しむ私には話しかけてくれないのですね。(二五・一六三)

あなたも時として、「最愛の月宿である」ローヒニーと離ればなれになります。「その時の」ご自身の苦しみを知っていないながら、どうして私に同情を示されないのですか。(二五・一六四)

私が輝きを失つたのをご覧になつても、どうかあなたは軽蔑的に扱わないで下さい。あなたもラーフ(月蝕)につかまつた時は、ご自身の光の輝きを失われるのですから。(二五・一六五)

概して世の人は仕事の成功を求めており、地位ある人には熱心な敬意を示すものですが、苦しみの中にいる(「不遇な」人を見下したりしない様な、そんな人物となると、世界に稀です。(二五・一六六)

◇ おやどうしてでしょう、あなたもご返事をなさらずに、地平線に行つてしまわれた。じゃあ今度は、チトラ龍の湖の端に住むかの苦行者のもとに、ともかくも行つて「消息を」尋ねてみよう。」—そう考えると、(a)明け方にアグニホートラ(の儀式)をなしておえ、(b)草葺きの庵の戸口に置いた籐の椅子に坐っている、(c)垂れ下がった髻髪の髪束が首まで被さつた、(d)とても瘠せた体の、(e)手首から数珠を垂らし、(f)黒羚羊の皮を肩に掛けた、その仙人のところには彼は訪ね来て、一隅に坐つて、「次のように」尋ねました。

「格別に清らかな誓行をなさっているお方よ、(a)天眼をもち、(b)敵と友に平等の心をおもちになるあなた様は、私の愛しい、マノーハラーという名の、心を奪う美しい容の女をこの地でご覧になりませんでしたか。(二五・一

六七)

私は鸚鵡・孔雀・鹿・蜜蜂・チャクラヴァーカ鳥・蛇・太陽・満月に質問しましたが、<sup>⑤</sup>、彼らは全く同情的で

なく、私の愛するひとについて、何も話してくれませんでした。確固たる善性をお持ちの方よ、どうかあなた様までも〔彼ら〕同様に、沈黙のまま〔の御返事〕となりませんよう、お願いいたします。〔二五・一六八〕

◇ すると苦行者はスダナを憐れみながら、次のように答えました。「若き人よ、さあ、心を強くもちなさい。マノーハラーはキンナラ王の都城への道を示すこの一枚の書き置きと<sup>(8)</sup>、この指輪、そしてこのスターという薬草を私の手に預けていったのです。若者よ、あなたはマノーハラーを得るために、甚だしい飢渴や疲労を消してくれるこの〔薬草〕を酥油で煮て食べながら、キンナラ王ドウルマの都城へと進み行きなさい。あなたのその『半狂乱の状態』という弱さを捨てなさい、それはつまらぬ人たちにこそふさわしいものです。常に心堅固でありなさい。あなたはマノーハラーを得られるのです。

心の怯弱な者たちは、水たまりを見ても絶望するものです。勇健な精進の心を有し、よく方策を知る者たちは、海ですら越え渡ります。〔二五・一六九〕

◇ その時、その聖者の『教導』という灯火の輝きによって、『半狂乱の状態』という闇が取り払われたスダナは、歓喜心をいただきながらその指輪を受け取り、次の様に考えました。

私は今や『指輪』という、美しい蔓の如き愛する女からの、一輪の花を得た。ああ〔次は〕いつ、心を喜悅させる『彼女との邂逅』という果実を得られるのか。〔二五・一七〇〕

◇ その後、彼はかの仙人に語りました。「聖者がこの『教導』という水を灌いでくださったことで、『半狂乱の状態』という熱苦が瞬時に消え失せました私は、次の様に〔男女の愛を〕見ます。諸々の性愛というものは、人がキンパーカ(カラスウリ的一种)の実を〔口中で〕味わいつつある時のように、すぐに得られる美味が最初だけ生じて、〔その後は〕苦味となって終わります。性愛という泥沼に沈んでしまった者のいったい誰が幸せを味わっているでしょうか。今も、過去も、未来もそれを味わうことは無いのです。そのように知りつつも、しかし私はマノーハ

ラーを得たいと今も望んでいます。その理由は次のとおりです。

愛する人との別れを恐れる若い女たちの心は花のように繊細で傷つきやすいものです。私との離別という毒が体じゅうにまわって〔苦しむ〕あのドウルマの娘はきつと命を棄ててしまうことでしょう。〔三五・一七二〕

私のために、もしあの哀れな女が命を棄ててしまい、それでも私が平気でいられるとすれば、これほど無慈悲な者が他にいるでしょうか。〔三五・一七二〕

ですから、私との離別によって彼女が命を棄てないうちに、彼女のもとに達するための精進を、憐愍の思いに強く動かされている私は開始いたします。〔三五・一七三〕

◇ このように語ってから、その仙人に別れの挨拶をして、一枚の書き置きと指輪と薬草スダーを手に持って彼はその草庵の地より退出し、そして次の様に考えました。「もしこの〔旅の〕計画を父母にどんな形であれ知らせてしまふと、きつとあの二人は〔私が〕キンナラ王の都城に行くのを妨げる行動を起こすに違いない。——そう考えると、彼は或る別の国に赴いて、親友の家でギ―で煮たその薬草を食べてから、〔彼女の〕書き置きに書かれているとおりに琵琶・二本の鉄の長くぎ〔楔〕・槌・剣・矢・弓をもち、〔路を進むうちに〕やがて真珠の集積のように真つ白に輝く雪のあるヒマラーヤ〔雪山〕を越え、ククーラカという名の山に達しました。スダナはその書き置きに記してあった一切のことに留意しながら、まずその山において人間の言葉を話す一匹の猿王を<sup>②</sup>さまざまな果実をもつて自分の家来にして、〔次の様に〕語りました。

「猿王よ、無数の猛獣に満ちたこのククーラカ山を、今私が速やかに越えられるようにしてほしい。」〔三五・一七四〕

◇ かの猿王はスダナに答えました。「さあ、いらして下さい。私の背中にあなたはお乗り下さい。——たちまちその猿に背中に乗せられたかの偉大な方〔菩薩〕はその山を越え出て、アジャパタ山で下ろされました。その大猿が

帰っていった後、其処で一匹の大変な長さの大蛇(ヤギを呑む蛇)が道を塞いで襲いかかってきたので、彼は矢で射てそれを来世に送り、アジャパタ山を越え出て、カールルーピンという山にたどり着きました。其処には思いのままに姿形を変えることが出来る女羅刹がいました。彼女はヴィディヤダラ(魔法を使う半神的な種族)の女に姿を変え、憂いに悩む女としてスタナに近づきました。

「天の大きな恵みをお持ちの方よ、私の兄は戦闘の中で他の冷酷なヴィディヤダラたちによって死の国(ヤマの住処)に逝かせられてしまいました。私が泣いているのはそのためです。そこで、もしあなたがヴィディヤダラになりたいと欲するのでしたら、私から種々の真言を受け取りなさい。私はあなたの正妻になりましょう。

わずかでつまらないその人間としての快樂を捨てて、さあ今日、私と共に空の上を飛んで行きましょう。まずはマラヤ山の梅檀樹がある様々な森林を、そして美しいメール山の頂たちを観望なさい。」(二五・一七五)

◇〔旅で〕起る出来事を既に知らされていたかの偉大な心の方(菩薩)は『この女は自在に姿を変えられる羅刹女だ』と考え、語りました。「ご婦人よ、私はヴィディヤダラになりたいとは思いません。ヴィディヤダラたるに相応しい誰か別の人を見つけないさい。」

その時たちまち、燃え輝く焰の束のような赤い髪を振り乱したその女は、その口をかつと開きましたが、その口腔の内は屈曲した牙をぎりぎりとなんで歯ざしりしたため生じた火花であふれており、それはまるでアンジャン山の洞窟の口に明滅する夥しい螢のようでした。水で膨れあがった雨雲のような巨大な腹をもち、しまりなくたるんで垂れ下がった両乳房が二つの瓶の如き両膝の所でぶつかり擦れあっており、刃を石で研いだ斧を握った、まるで雨季の夜そのものであるかのような、とても恐ろしい姿を現したその女は、スタナに襲いかかってきました。

するとスタナは大きく笑って、言いました。「ご婦人、あなたは先にヴィディヤダラの娘の姿をもって、私の心を愛神の隷下に置こうとして失敗しました。ましてこんな怪異な姿をもって、どうしてあなたは私を愛させること



ができるでしょう。さあ立ち去りなさい。あなたのするこんなことは全くの徒労です。もしも私を攻撃し続けてやめないなら、その時はこの矢があなたを久しい間、動けなくするでしょう。」— それでもその女が攻撃をしてくと、スタナは琵琶を演奏しました。

恐ろしい女羅刹は、彼女の心と耳を魅了する琵琶の響きを聴くと、「何てお上手!」といって、その場から忽ちかき消えました。(二五・一七六)

◇ その後スタナはそのカーマルーピン山を越えて、エーカダーラという名の山に行きました。他の迂回路を通ることは〔この山を〕回避することは出来ない、そう彼は考え、

その山〔の絶壁〕の上で、彼は一本の鉄の長くぎを、〔深さ〕一尺〔前腕の長さ〕で固定するため、非常に重たい槌をもって幾度も打ち込みました。(二五・一七七)

それからその長くぎの上に乗ると、もう一本の長くぎを〔土中に〕何度も打ち込みました。そしてその〔第二の長くぎの〕上に立つと、下にある長くぎを引き抜きました。(二五・一七八)

このようにして、キンナリーに達するために偉大な方策と勇ましい精進をそなえたスタナは、その山を踏破しました。(二五・一七九)

◇ さてエーカダーラ山を越えると、ヴァジュラカという名の山に行きました。彼は其処で、山の頂に止まっている、虎の爪のように屈曲した鋭い嘴をもつ一羽の雌鷲がいるのを眺めて、「あれが、鷲の姿をとる例の女羅刹だろう」と考えました。「方策を用いて、あの〔雌鷲〕に私を運ばせて、ヴァジュラカ山を越えることにしよう」と、そう考えてから、

或る樹の根元に来て、世の射手たちの中の最高の射手であるスタナは、ダーンバナ材で出来た弓をかざすと、とても柔らかな草を一心不乱に嚙んでいる一匹の鹿を、鋭い矢で射ころしました。(二五・一八〇)

〔美しい〕鹿の目をもつ方〔菩薩〕は、毛がある方を外側にした、血が滴っているその鹿の生皮で〔自分の〕体を覆ってから、じっとしていました。(二五・一八二)

その時、驚の姿をした食肉鬼の女は、鹿の皮をつけてじっと動かずにいる彼を勢いよく〔虚空に〕持ち上げると、その山から運び去りました。(二五・一八二)

道の完遂のため勇ましい精進をなす彼は、その鹿皮を払いのけると、魔女の頭を剣で切り落としました。(二五・

一八三)

◇ その後、カディラカ樹(ベグノキ)が沢山生えた、カディラカという名の山に來ると、彼は「この山はこの真つ暗な洞窟の口から中を通り抜けて出てゆく必要がある」と考えました。「しかし疑いなくこれはかの偉大な森に違いない。この森では五種の効能をもつ大葉草が存在していて、それは一匹の龍に所有され、また大石によって阻まれている。その偉大な葉草は、

輝きにより黒闇を消散させ、寒さや暑さや毒を消し、蛇・羅刹・盜賊から生じる危難を取り除く、といわれている。(二五・一八四)

◇ その所有者である蛇には眠りに陥る時があるに違いない。なぜなら、ランプの焰のようにその葉草がこの場所を照らしているからだ。そこで、その蛇が眠っている間に、あの大石を持ち上げて、葉草を取ろう。」—そう考えた後、腕力をもってその重たい大石をどかして、「蛇が眠っているすきに」その葉草を頭に縛りつけると、洞窟の中に潜り込んでゆき、

すぐさま彼は、「通行者の」命を奪う機械仕掛けの二つの山石を、「それらの」つけ根にある二つのスイッチ(鉄の小棒)に二本の矢を打ち当てることで、停止させました。(二五・一八五)

◇ それから少し奥に進みゆき、

彼はすぐさま、劍を持った二人の鉄製人間のへその所に付いているスイッチを、二本の矢で打ち当てました<sup>(40)</sup>。

(二五・一八六)

◇「両方〔の機械人間〕が動かなくなると、その間をくぐり抜けて彼は先に進みました。そして沢山の機械を破壊した後、ワニたちのいるあれこれの川を越えて、ヴェートラ川に着きました。

猛烈な風によって向こう岸からその先端が吹き流されてきた、蔓に似た茎をもつ葎になんとか懸命にしがみついて、偉大な心の方（菩薩）はその大きな川を渡り切りました。それはまるで大果をもたらず、前世でなした誓いをついに果たしたかのようでした。(二五・一八六)

◇ヴェートラ川を越えると、彼は沢山の林苑をそなえてとても美しい、黄金の城壁やバルコニーに飾られた、マノーハラーの父の都城を見ました。その〔都城〕で彼は、或る場所にあるヴィディヤーダラたちの〔ための〕園林に入りこんで、樹々の間に隠れていると、

彼は五百人のキンナリーたちの集団が、池の澄んだ水を甕に入れて、かついでゆくのを見ました。(二五・一八八)

◇そして彼女たちが立ち去ると、その場に一人の、老衰によって仕事をこなす力が損なわれた婦人が、黄金の水甕を持ち上げようと「空しく」吐息をつき、池のほとりに残っていました。するとスダナは「このキンナラの女召使が老いによって仕事を成し遂げる力を失っていることは私〔の目的〕のために役立つのではないか。もしこの機会がなければ、どうして私はこの場に独りでいるこの女性に、マノーハラーの情報を得るため近づくことができようか」と考え、彼女に近づき、尋ねました。「善き婦人よ、この水をどこにお運びになるのですか。」その年老いたキンナラの女召使はスダナを見ると、「これはきつとあのヴィディヤーダラの園林から出てこられたヴィディヤーダラ族の若様が、好奇心から私にお尋ねになつてに違いない」と考え、答えました。「旦那様、お聞きください。

キンナラ王ドウルマ様には、マノーハラという名の、心を奪う美しさの娘がおりまして、以前は一人の人間の男の所有(享受)するところとなっていました。この地に再び何とか戻ってこられたのです。(二五・一八九)

お父上の王様は、その娘の肢体から発する人間の臭いを嗅ぐことに耐えられず、そのため、その〔王女〕は毎日、甕の口から注がれる芳しい水をお浴びになられています。(二五・一九〇)

その時スダナは〔その女を〕恋い慕う者として心配そうに幾度も視線をあちこちの方角に投じてから、その〔女召使〕に語りました。「眩い光に飾られたこの指輪をこっそりマノーハラに与えてもらえませんか<sup>(註)</sup>。」(二五・

一九一)

◇ 彼女は「お指図のとおりにいたします」と言い、その指輪を受け取りました。菩薩は水甕を彼女の腰に乗せてあげて、再びその園林の中に入り込みました。その女召使は行くと、マノーハラの水浴びが終わった時に、その指輪を彼女の両膝の上に落としました。

するとその指輪をうけ取ったマノーハラは、慕わしい思いに満ちた心で、「あなたはこれをどうやって手に入れたのですか」と、人気のない所でその女性に尋ねました。(二五・一九二)

◇ すると彼女は、「ヴィディヤダラの若様が、マノーハラに与えてくれと〔言つて〕、この指輪を私の手に渡したのです」と答えました。その時キンナラ王の娘は「間違はなく夫(聖子)がこの地にやってきたのだわ」と考え、再び彼女に言いました。「出来たら、あなたがその方をここに連れてきてくれると、すごく有り難いだけど。」  
「女は答えました。「できる限りのことをします。もし私にうまくやれたら、あのヴィディヤダラの若様をお連れいたしましょう。」そう返事して、かの園林に赴くと、スダナに言いました。「旦那様、マノーハラ様があなたに会いたがっておられます。」

どうか美しく女に変装して、それから私と一緒に、あなたは今日の真夜中、闇が最も濃くなる頃に、邂逅を望

むマノーハラー様の住まいへ、足早に入られて下さい。」(二五・一九三)

「そうします」と怖じることなく彼は同意し、美しい女の変装に身を隠し、そのキンナラの老女に導かれて、夜中にマノーハラーの住まいに入り込みました。(二五・一九四)

スタナを見るとびっくりしながら、愛の重荷のゆえに体がぐったり重たくなった彼女は、なんとかベッドから這い出しました。(a)震える雌鹿の目をもつ、(b)長い間の別離によって瘠せてしまった、その最愛のキンナリーを、彼は両腕で抱きしめました。(二五・一九五)

◇ スタナと長話をするにより、やつとのことで長い別離の苦しみと心配を精算することができ、願望の果実を得た彼女は、次の様に言いました。「ああ、私のために、あなたはここに来ようと沢山の苦勞を味わわれたのですね。私の心がひどく頑なであったため、こんなにあなたを私は苦勞させてしまったのです。」——スタナは言いました。「怖がりのひとよ、そう思わないで下さい。

人は多くの場合、「待ち受ける」大きな烈しい苦しみを考えずに、安らかな幸せと結びついた法の道(義務的な生き方)をうち捨てて、ずっと慕い続けている人のため、愛情の故に、無鉄砲なこともするものなのです。」(三

五・一九六)

◇ マノーハラーは言いました。「ああ、私はあなたにこの上ないほど愛されていることがわかり、生まれた甲斐を味わいました。今や、

まるで私のこの『心』という夜咲きの白睡蓮が、これまで『長い別離』という太陽に伴う熱い苦しみによって弱りはてて蕾の状態に陥っていたのに、空高く昇った最も愛しい月によって「力強く」目覚めさせられたかのようです。」(二五・一九七)

◇ マノーハラーはかの年老いたキンナラの女召使を呼んで、言いました。「お父様がそのうちに、わが夫がここに

滞在していることを何処からか聞き知るかもしれませんが、そうすれば激怒して、どんな恐ろしいことをするかしたるものではありません。そこでこの場合、こうしましょう。あなたは夫をあのヴィディヤードラの園林に、夕方に連れて行って下さい。私は明日、齋戒（断食の精進）を行い、愛神カーマ様を供養するという口実のもとに、その場所にゆきます。」

「可愛いひとは適切な事をおっしゃった」と、スタナはそう言って、夕刻にその老女と一緒にヴィディヤードラの園林に入り、絵画陳列のための建物で夜を過ごしました。さてマノーハラーは夜明け頃に真っ白な上等の衣を着て、付き人の女たちに香と花環を持たせて、その園林の近くにやって来ると、その付き人たちに言いました。

「（ここでは）大変な努力で断食し沐浴して身を清めた女が、たった一人で、プージャー（香・花の供養）により愛神カーマ様にお仕えしなければならぬそうです。」（二五・一九八）

愛神様が目に見える姿で臨在される、この園林の外に、あなた方は控えていて下さい。私が一人で入ります。」

（二五・一九九）

◇ 付き人の女たちが運び来た香や花環などを手に持って歓喜園の中に入ると、歓びの微笑がほころんで示した宝玉のような齒の燦めきに美しく照らされた容をもつ彼女は、スタナ（の全身）に芳香ある軟膏を塗ってあげました。すると菩薩は笑って言いました。「綺麗なひとよ、愛神を供養するための道具であるこの塗香をどうして私の体にも用いるのだい。愛神の供養をされたらどう？」—マノーハラーは笑って答えました。

「あなたのお言葉が（愛神のもつ）芳しい花の矢。「あなたの」お姿が弓。「あなたの」矜持がマカラの旗。それ故私にとつて、あなたこそ、花の旗印をもつかの神です。いったい誰が、シヴァの怒りによって愛神が焼かれ「消えて」しまったなどと信じられるでしょうか。」（二五・二〇〇）

◇ このような楽しい会話で二人が愛情を深め合いながら其処で過ごしていると、キンナラ王が、後宮で仕える女

たちを伴って、その園林へとやって来ました。すると父王の来たことに気づいたマノーハラーは立ち上がり、動揺した様子でスダナに言いました。「あなた、私の両親がやって来ました。それ故、蕨のあずま屋に足早にお入りください。」

そこでスダナは急いで立ち上がり、忍び足で歩み去って、蕨のあずま屋の中に入りました。その後、母（王妃）がマノーハラーのもとにやって来て、尋ねました。「愛しい子よ、お前は愛神様への供養をつつがなく終えることができましたか。」マノーハラーは答えました。

「私は篤い信仰心をもって、この園林で愛神様への供養にとりかかっていたところです。ところがこのカーマ神のご聖所が、お父様の家来たちによって急に間隙なく取り巻かれてしまいました。」〔二五・二〇二〕

◇ 母は答えました。「わが子よ、お前は心を集中させて愛神様への供養を遂行しなくてはなりませんよ。私は〔邪魔せぬよう〕ここにやって来た従者たちを制止しましょう。」―「わかりました」と答えて、マノーハラーは愛神への供養を行いながら、考えました。「私はどのくらいの期間、こうやって夫（聖子）を隠したままでいられるだろうか。それ故、お母様には打ち明けてみようか。」そう考えると、話をしました。

「お母様、もし娘婿（私の夫）であるその人がなんとかこの地にたどり着いたとしたら、あなたの心はお喜びに  
 なられるかもしれませんね。しかしお父様は完全にお怒りになるではありませんか。」〔二五・二〇三〕

◇ 母は答えました。

「愛しい子よ、もし私の娘婿であるその人が今ここにやって来たとしたら、私はあなたのお父様をお宥めしながら、とても歡ぶことでしょうね。」〔二五・二〇三〕

◇ マノーハラーは言いました。「もしそうでしたら、お母様にその娘婿をお見せいたしますわ。」そう言って、尊い母に指し示しました。「ここをお行きになって、蕨のあずま屋の中にいるわが夫に、『さあ出て来て、母に挨拶し

なさい』と話しかけてみてください。」—かの母は「そうしましょう」と答え、蔦のあずま屋の中にいるスダナに向かって、「自身が来た」そのなりゆきを話しました。するとスダナがその蔦のあずま屋から出て来ました。マノーハラーは言いました。「さあお母様はどうか娘婿をご覧になってください。」—母は答えました。

「蔦のあずま屋から、このヴィディヤダラの若君が出て来られただけです。私のその娘婿殿はどこかにいて、恐怖を味わっているではありませんか。」〔二五・二〇四〕

◇ マノーハラーは大きく笑って言いました。「間違いなくこの人こそ、お母様の娘婿です。」—母は答えました。「愛しい子よ、もしそうなら、お前は人から気の毒がられることなんてない〔幸せな〕子だよ。」

その後スダナはマノーハラーの母のもとに近づいて、丁寧にあ挨拶をしました。その母は菩薩の頭にキス（嗅ぐように鼻をつけるキス）をすると、祝福の言葉を述べました。

「ガンガ―河と海の如くに、名高い家系のあなたと私の娘とが、今後決して間を裂かれることがありませんように。」〔二五・二〇五〕

◇ 「それでは、愛しい子よ、今この事をあなたのお父様に私からお話ししましょう。」—そう言うてから、「王妃はドウルマ王のもとにやって来ると、その話を始める頃合いを見て、次のように語りました。「あなた、もしマノーハラーの夫がなんとか此処まで来たとしても、あなたはなお、受け容れませんか」—するとドウルマ王は眉を顰めて、明らかに忿怒を示しながら、答えました。

「悪の道に生きるそいつをもし私が見つけたら、刀で切り刻んで、血が滴る〔四肢〕を諸方に投げ捨ててやろう。」〔二五・二〇六〕

◇ マノーハラーの母は言いました。「娘を」助けてくれたその人に対して、恐ろしいことを考えるのは正しいことではございません。」—ドウルマ王は言いました。「その者が助けてくれたとはどういうことか。話しなさい。」—



彼女は答えました。「マノーハラーは戻つて来たばかりの頃に、このように私に語ったのです、

『私は残忍な狩人から、その王子に買ひ受けてもらひ、彼の宮殿に入れていただいた後、あれこれの享樂の品をもつて、正しく、篤い待遇を受けておりました』と。」(二五・二〇七)

◇ ドウルマ王は言いました。「もしその通りなら、その彼は本当にわれわれの恩人だ。」彼女はドウルマ王から怒りが消えたのを理解して、更に言いました。「あなたがいつもの親切なお心を取り戻されたのなら、私はあなたに本當のことをお話ししますわ。実はここにその娘婿が来ているのです。また、

私のみるところ、その王子はただの人間とは思えません。わが娘をめざして、通行不可能な道をこうしてはるばる越えてきたのですから。」(二五・二〇八)

◇ ドウルマ王は言いました。「もしそれが本當なら、私はその娘婿に会つて見たいものだ。」すると彼女は女門衛に、スダナを連れてくるよう指示しました。女門衛は行つて、菩薩に告げました。「キンナラ王があなた様と会うことを望んでおります。」

その時スダナはドウルマ王のもとに赴いて、丁重に挨拶を述べて、敬礼しました。その後、多少の怒りが心に残つていたキンナラ王は、祝福の言葉を与えてから、菩薩を川岸に連れてゆき、言いました。

「王子よ、今日中に、幾ヨージャナ(由旬)〔の土地〕を塞いでいる、この川岸の地に生い茂つた葦の藪をすべて根こぎにしてから、ここで「なし終えた仕事の」視察を私に与えるならば、わが娘と様々な財宝とを、君に与えよう。」(二五・二〇九)

◇ 菩薩は「承知しました」と答えると、鋤を取つて、びっしりと密生した葦原の根こぎを始めました。ドウルマ王は自分の宮殿に戻つてゆきました。マノーハラーは悩んで、次のように考えました。

「私の愛しいあの方が、たった一人で、あの上品で繊細な両手で、どうやって葦が密集した茂みを根こぎにする

ことが出来るだろう。」〔三五・二一〇〕

◇ その時、神々の王（インドラ）は、スダナが葦を引き抜いている様子を眺めて、「かの菩薩が一日で葦を引き抜くことは無理である」と考え、ヤクシヤの若者たちを呼んで、命じました。「あの菩薩がたった独りで葦を根こぎにすることは出来ない。それ故、

お前たちは、新しい雨雲のように黒くて、反った牙をもつ猪の姿にただちに化けて、太陽が沈む前までに、たちまち葦原を根こぎにしまいなさい。」〔三五・二一一〕

◇ 彼らヤクシヤの若者たちは「御意のとおりに」と答え、インドラに敬礼してから、キンナラ王の都城にやって来ると、猪の姿に変身し、その葦原を根こぎにしました。

生類への益を求め続ける偉大な心の者たち（菩薩）の、無数の生の間に積み重ねた善業の力に突き動かされて、神々であっても（かように）、まるで突き棒でつつかれたように彼らの援助者になるものなのです。〔二五・二二二〕  
◇ 猪の姿をとったヤクシヤの若者たちが立ち去った後、菩薩はドウルマ王のもとにやって来て、「葦原の根こぎが終わりました」と報じました。ドウルマは自らの目でそのことを確かめると、「ああ、この王子は神力をもつ」と思いましたが、更に菩薩に命令を与えました。

「これらの葦すべてを砂ごと河の向こう岸に投擲しなさい。そしてこの一アーダカ（二柁の量）の胡麻を（この土地に）播いた後、その全部の容量を再び「集めて」持つてきなさい。」〔三五・二二三〕<sup>12)</sup>

◇ 菩薩は「仰せのままに」と答えると、その河の向こう岸に葦を放り投げ始めました。今度もまた、神々の王の威神力のゆえにそれらの葦は猛烈な風によってたちまち河の向こう岸に運び去られてしまいました。その後菩薩は胡麻をその地面に播いてから、再びそれを集め始めました。するとまたインドラが、胡麻を集めさせるために、かのヤクシヤの若者たちを蟻の姿で派遣しました。かれら「蟻たち」はその胡麻を集めて、一アーダカの量を満たし

ました。菩薩はその一アーダカの胡麻を持って、その日のうちにドウルマ王に見せました。するとかのキンナラの王は「おお、何たる驚異か」と思いましたが、再び告げました。「卑しい人たちのする仕事をわが王子に課するのは適切ではない。

これらのわが息子たちと一緒に「弓を射て」、もし君が七本の鉄製のターラ樹と七箇の鉄で出来た雌猪を、一本の矢で貫くことが出来たら、君にマノーハラを与えよう。」(二五・二四)

◇「仰せのままに」と菩薩が答えたので、キンナラの王は都城の外側に七ターラ樹と七鉄猪を設置させました。付き人たちを連れて父王の後に続いて、弓を手にしたキンナラの王子たち全員が、菩薩と一緒に弓技場にやって来ました。付き人たちが用意した座席に、最初にドウルマ王が腰をおろした時、

マノーハラは目に涙を溜め、「わが夫(聖子)は一本の矢で鉄製のすべての的を貫くことが出来るだろうか」と思いながら、心をかき乱されていました。(二五・二五)

力を誇る者たちである、それらのドウルマ王の息子たちの大勢の集まりの中で、或る者が鋭い矢で一本のターラ樹を射貫くと、或る者は二本のターラ樹を射貫きました。(二五・二六)

◇それらの、もてる限りの力を示したキンナラの王子たちが着席し終わった時、

スタナはまず弓柄を堅く握りしめて、目を不動にして、身動きせず弓を構えると、鋭い矢を放ちました。(二五・二七)

五・二七

すると矢は、それら七つの鉄のターラ樹と鉄猪すべてを貫通し、あたかも地下世界を見たいと願ったかのようになり、その矢柄を潜らせて地中に深く入りました。(二五・二八)

◇その時、キンナラたちは誰もがただちに「お見事、お見事」と叫んで、感嘆のあまり指をくるくる旋回させながら、菩薩に向かって近づきました。キンナラ王も甚だ驚嘆しました。

かの偉大な心の方(菩薩)が偉大な力をもつ者として、それらの的を一本の矢で射貫いた瞬間に、マノーハラーの顔はぱつと笑みに輝き、美しい齒列を見せました。(二五・二一九)

◇ その後キンナラ王は屋敷に戻ると、スダナに再び「かく」語りました。

「もし「マノーハラーが」全く同一の姿・同じ年齢・装飾品をもつわが娘たちの中にいる時でも、君が『彼女だ』と、自分の妻をすぐに認識することが出来るなら、私は「結婚を」認めよう。」(二五・三〇〇)

◇ 「承知しました」と菩薩は答え、自分の住まいに戻ると、かの老いたキンナラの女召使にマノーハラーへの伝言を頼みました。「あなたのお父上が、『もし君が全く同一の姿・年齢・装飾品をもつ姉妹たちの中にいるマノーハラーを、彼女であるただちに認識することが出来れば、私は彼女を君の妻と認めよう』と言って、そのひどくずるい、もう一つの条件を提示されました」と。するとマノーハラーから伝言がありました。

「足輪が衣服に隠れて見えないのが、私の姉妹たちみんなの足です。彼らの中で私だけ、両の足輪がはっきり見えることでしょう。」(二五・三三二)

◇ ですから、それを目印として見れば、あなたは姉妹たちの中にいる私を識別できます。——そう、かの女召使いは菩薩に伝えました。心悦ぶスダナはキンナラの王に呼び出されて、彼の許にやって来ると、「そこに」年齢も容姿も装飾も全く同一のかのキンナラーたちが、まるで稲妻たちのように眩い姿で見ました。ドウルマ王は彼に告げました。「王子よ、ここであなたの妻であるその女を手で掴みなさい。」

その時彼は、(a)光り輝きながら揺れている足輪のある両足によって「他の女と」違いが見分けられた、(b)地面を見つめて視線を動かさない、(c)はにかんだ顔をしたマノーハラーを、手の先で掴みました。(二五・三三三)

◇ するとドウルマ王は心から歓び、スダナに語りました。「君は私の命令を、どれも難なくすべてやり遂げた。それ故、このマノーハラーをあなたの正式の妻として受け取り、娶りなさい。また、

繊細な体をもつ人よ、私はこれまで、客人であるあなたを徒らに、無慈悲に苦しめてしまったが、そのことをどうか赦してほしい。王子よ、よく訓育された心をもつ賢者たちが、長上の者たちの「過ちの」いかなるものを堪忍できないことがあるうか。」(二五・三三三)

◇ スタナは答えました。「長上の人たちの「お与えになる」『命令』という仁慈によって、私はじつに恵みを受けることができましたのです。」

それ(命令という仁慈のしわざ)こそが、深いお心をお持ちになる長上の人たちのなすべき仕事であり、そこにおいてこそ、その人たちがもつ、命令を下すことの賢い巧みさが発揮されるのです。」(二五・三三四)

◇ 天界の神の若者がアプサラス(天女)と楽しく過ごす様に、菩薩はそのキンナリーとしばらくドウルマ王の宮殿で楽しく過ごした後、キンナラ王に言いました。「閣下、もしお許しをいただければ、マノーハラーと共に、わが父の宮殿に去りたいと思います。」するとドウルマ王は「王子の願うとおりになさい」と答えてから、娘たちに命じました。「愛しい娘たちよ、行って、岳父殿の家に旅立とうとしているマノーハラーを綺麗に飾ってあげなさい。」—彼女たちは「かしこまりました」と答え、

「姉さま、徳性の勝れた旦那様と共に、今日あなたは御舅様の家に行かれるのだそうですね」と、そう言いながら、姉妹たちは目に涙を溜めて、伝統の形どおりにかのキンナリーに〔装飾品で〕飾り付けをしてあげました。

(二五・三三五)

それらの装飾品はまるで、「私たちがあなたは飾り付けるものではありませんよ、あなたはすでにあなた自身の美しさによってこれほどに飾られているのですから」と、そう「思つて」彼女の肉体の上で羞じているかのようでした。(二五・三三六)

◇ さて飾り付けが完成したマノーハラーは、姉妹たちに伴われて、しずしずと慎ましやかに出て来ました。

涙ぐんでいる家族たちに見つめられ、「両親に」深くお辞儀をして、その蓮の如き容をうつむけたままでいる彼女は、目に涙を浮かべている父母の両足をしばしの間、こぼす涙の滴りで濡らしました。(二五・三二七)

母は、「お前なしでは、私は心を強く保つことが出来ません。愛しい子よ、お前はいつまた戻ってくるの？」と、そう言いながらマノーハラーを抱きしめて、しばしの間、取り乱して泣いたのでした。(二五・三二八)

◇ その時キンナラ王は、差し迫った娘との別れという悲苦に悩みつつも、それでもなんとか自分自身を奮い立たせて、マノーハラーの母に言いました。

「光の環をもつあの太陽が、大空の第三の位置に来たため、日差しが生き物たちの心を悩ませながら、急に烈しくなった。この新鮮な睡蓮が水を失って萎れゆくのと同じように、お前の娘もきつと疲労してしまうことだろう。だから、さあ、行かせてやりなさい。きつとまた戻ってくるだろう。くよくよするのをやめなさい。」(二五・三二九)

◇ それからドウルマはスダナの頭に髻珠を付けてやり、言いました。

「この〔髻の〕宝珠の威力により、君は超自然力の偉大さを有し、神のごとく何にも妨げられずに大空を飛行することができる。(二五・三三〇)

◇ だから、今やマノーハラーの手を取って、虚空に飛び上がり、望むように君(若き人)は父王の住まいへ行きなさい。

私のこの娘は気高く善良な女であり、君は栄光を有する者たちの中の最高者である。君たち二人は、言葉と意味〔の密接な関係〕のように、お互いに支え合うものとなりなさい。」(二五・三三一)

夫婦は〔別れに〕心乱している両親に深く頭を下げ、しばしキンナラーたちを抱きしめてから、装身具の宝石をきらきらと輝かせて、速やかに空に飛び立ちました。(二五・三三二)

後ろを振り返って見ては涙を零しながら、夫とともに空を通過して出発していったかのキンナリーを、母はその行路が視界から消えてゆくまで、涙を浮かべながら見続けていました。(二五・三三三)

◇ スダナは自分の家の人たちとの別れに情気返っているマノーハラーの涙を幾度も拭いてあげながら、

空を飛行しつつある彼は、まるで水滴がついた満開の睡蓮の花のように、彼女の顔に汗のしずくが浮かんでいるのを見ると、日差しの熱苦を防いであげるため、大きな布を投げかけて両手で「彼女の体の上に」拡げてあげました。(二五・三三四)

◇ すると急に、ハステイナーブラの近くにさしかかりました。

「心を奪う美しい顔をした華奢な体の美女に寄り添いながら、吹く風によつて少し褻が波立っている(その女を)包みこむ布を手を持つ、あの男はいつたいヴィディヤータラなのか。空を飛んでやって来たぞ」と、都城の人々は「驚愕して」彼を眺めて、じっと目を凝らしました。(二五・三三五)

◇ その後、空の上から降りてきた者がスダナであるのを見てとると、門番は大悦びしてダナ王に報告しました。「閣下、あのスダナ様が、マノーハラー様とご一緒にお戻りになりました。」するとかの王は「それは本当だろうか。……嬉しい報せほど信用できないものだ」と言いながら座から立ち上がりましたが、キンナリーを伴ってスダナが入ってきたのを目にすると、「これは夢ではないのか、現実なのか」と呟き、感極まって何度も抱擁してから、彼を母のもとに導きました。

すると「長い」別離に深く苦しんでいた母は立ち上がり、歓喜のあまり涙に溢れた眼でその息子をじっくり眺めては、何度も抱きしめ、頭にキスを与えました。(二五・三三六)

◇ その時マノーハラーは王妃に深くお辞儀をして、言いました。

「わが夫が、幸福感を伴つてとはいえ、これまで私のために不撓の努力をしてきたことによつて、あなたは(離

別の」苦しみを味わいになりました。どうかそのことで私を堪忍なさって下さい。」(二五・三三七)

◇ 王妃は答えました。「愛しい娘よ、私の家族にとってあなたは誇りです。どうしてあなたに対して私が怒りをいなくでしょうか。こう考えてみなさい、

もし人が不撓の努力をしなかったとしたら、偉大な蛇(ナーガ)たちの諸宝石の彩りの美に光り輝く地底世界がある海から、いったい誰が宝石を得られるでしょうか。」(二五・三三八)

かの王はわが息子が——けがれなき名声の蔵、世に聞こえた偉大な人たちの頂に立つ偉徳の人が——戻って来たので、都城において、天界の栄耀栄華を思わせる「華やかな」カウムデー祭(月光祭)を、その時節でもないので、長い間催しました。(二五・三三九)

◇ スゴートラがなした忿怒と嫉妬の「陰謀の」話をダナ王は聞き知りましたが、婆羅門であるこの者は死刑にしてはならぬと考え、自分の国からの追放に処しました<sup>(43)</sup>。

さあこのように、最初は、感官の対象から生じた僅かな快樂が、快樂主義者たちにとって心を魅するものであっても、最後には「それが」苦悩に変わるものであることをよく認識して、あなた方は、それらの快樂的欲望を、自己愛と一緒に、あたかも人が遠く避ける毒蛇のように、すぐさま、いつまでも、捨て去るべきなのです。(二

五・二四〇)

『キンナリー・スタナ・ジャータカ』、『第三種類の』第五話「終わる」。



## 【注】

- (1) この章の和訳は Straube (2019) の梵文校訂本に基づいた。翻訳にあたり、チベット大蔵経テンギュルにあるハリバッタの蔵訳のほか、Khoroch (2017) の英訳を参照した。
- (2) Cf. Schlinglof (2000), I, S. 187-188; II, S. 35; Le Coq & Waldschmidt (1928), S. 38.
- (3) アジャンターのスタナ壁画は杉本卓洲 (二〇二二)「三七八―三八〇頁に解説があり、Singh (2017), pp. 71-94 にその壁画のカラー写真がある。なお杉本卓洲はナーガールジュナコングダにあるスタナ説話の浮彫も同書の二三四―二三七頁で解説しているが、この南インドの遺跡にある浮彫は明らかに有部系ではなく、『マハーヴァストゥ』のスタナ説話の伝承に近い点で注意される。
- (4) 五世紀前半のネパールのチャーパヒラ碑文には、キンナリー・ジャータカの絵によって装飾されたチャイティヤが寄進されたことを記すが、このことは、スタナ説話の人氣が五世紀前半にはネパールにまで達していたことを示すものであろう。スキリング (二〇〇五)、一―三頁参照。
- (5) クシェーメーンドラのこの作品の現存する一〇七の章の中で、そのスタナの章 (第六四章) は最高の詩節数 (三三八詩節) をもち、章の長さで第二位〜第四位であるところの第四〇章、第六章、一〇八章と比較しても、その章は百数十詩節多く、詩節数で他の章を断然引き離している。
- (6) なお第一廻廊王壁下段の九一―一〇五図を、並河亮 (一九七八、一二二―一二五頁) や宇治谷祐憲 (一九八七、一二二―一二九頁) はヴェッサンタラ (ジャータカ五四七) による図と主張するが、説明が強引すぎて、同意できない。未比定とすべきである。
- (7) Schlinglof (2000), I, S. 208-212. なお『南海寄帰内法伝』228a はこの本生話の韻文作品 (月官の作) の五天竺での人氣を記す。
- (8) ただし『六度集経』では第八三話のスタナ説話は智慧波羅蜜 (明度無極) に分類される。その第八三話では、菩薩が生き物を殺して祭祀を行おうとするバラモンを論破して、王に立派な説法をするという、菩薩の智慧が強調する要素が入っている。『マハーヴァストゥ』のスタナ説話でも、菩薩がバラモン教の供儀への批判を内容とする説法を王に行っている。それに対して、有部系の伝承のスタナ説話には、供儀批判の説法という要素が無い。ハリバッタのジャータカマラーではほとんどの章で菩薩の説法が入るのに、第二五話のスタナ説話の章には珍しく説法が無い。有部系ではこの話を精進波羅蜜に分類するしかないであろう。
- (9) 「白鳥乙女」のモチーフが出る全世界の民話の話型について、わかりやすくそれをまとめて説明しているのは S・トンプソンの名著『民間説話』(The Folktales, 1945) である。トンプソンはその本の第二章で、白鳥乙女の話が出てくる三つの話型を語る。それは

MT313、MT400、MT465である。まずMT313「罽の逃走を助ける女」の話型は彼によって次のように説明される。「若者が旅の途中、水辺で娘たちが水浴びしているのを見る。岸に白鳥の衣を見つけ、娘たちのものであることを知る。衣の一つをとり、その持主の娘に衣を返すかわりに妻になってくれという。娘は承諾する。白鳥の衣をつけて男を伴い、父の家へ行く。そこで再び娘の姿になる。若者は娘の父親から難題を課せられ、娘の助言によってそれを果たす。(中略)：普通は白鳥乙女の話で始まり、娘に伴われてその父の家に行くことになる。父は無慈悲な鬼で、若者に難題を課し、出来なければ殺すという。仕事の種類は、一晚のうちにぶどう畑を植え付ける、長年放ってあった家畜小屋を掃除する、森の木を切りはらう、魔法の馬をつかまえる、大量の穀物をえり分ける、大きな池を作る、などである。鬼の娘がこれらの仕事をしてくれる。そして男とともに逃げようと図る。最後の難題は同じように扮装した姉妹たちのなかから相手の娘を選びだすこと。」(荒木・石原訳、上、一四〇—一四一頁；Thompson, pp. 88-89)。このようにMT313(呪的逃走)の話型において導入として白鳥乙女のモチーフが用いられる場合がある。この話型では人間の夫から妻が逃げるのではなく、妻が夫を父親の家に連れてゆき、そこで父親からの難題があり、最後に呪的逃走が行われるのである。この話型の説明に次いでトンプソンは、MT400とMT465を説明する。

MT400「失踪した女房を探す男」の話型は、夫婦の呪的逃走よりも夫による妻の搜索の旅と再会に重点が置かれる。これについて、トンプソンの説明文を以下に引用する。「次に白鳥乙女が、結婚して後鳥衣を発見して飛び去り、夫がこれを探しに出るという話は上記の話とはまったく別の違う型に属し、『失踪した女房を探す男』(MT400)に分類される。この型においては話の中心は女房の失踪から再会までにあり、白鳥乙女の挿話はその前段の一つの形となつては過ぎない。この場合女房は鳥になつて夫の留守に去るが夫に謎の言葉を残して自分の居所を解かせる、という形になつては過ぎない。この白鳥乙女の前段のほかいくつかの形がある。(中略)：以上のように前半にはさまざまの形があるのに比べて後半の別れた女房を探しに出るから再会するまでの部分は変つた形が少なく、大体一様に語られる。夫は旅に出て野性の動物、鳥、魚を支配する人々に会う。また年とつた鷲の忠告をきく。太陽と月に道をきくがわからない。しかし風が道を教えてくれる。老婆に会うと、その姉の家に行けといわれる。そこからさらに年配の老婆の家に行き、そこで女房の居場所を教してもらう。その間に高く滑り易い山を、後をふり向かずに登るとか、呪宝をとり合つて争っている人々に会い、彼等をだまして呪宝をとるなどの挿話がある。呪宝は普通鞍、帽子、マント、長靴、剣などである。北風の助けと呪宝の力によつて女房のいる城に着く。話によつては女房がちょうど他の男と結婚するときに着くことになる。菓子の中から出た指輪、またはその他のものによつて夫を確認し、二人は再び結ばれる。ある場合にはこの後さらに「罽

の逃走を助ける女」の話へと続き、夫が妻の父親から難題を課せられ、最後に二人で逃げ出すという結末になる。このようにいろいろな事件が万華鏡のように展開する話であるけれども、これらの事件は大体いつも定まっております、一つの話型としてはっきりした特質をそなえている（荒木・石原訳、上、一四四―一四五頁・Thompson, pp. 90-92）。―以上のトンブソンの説明の引用文において、私が太字にした文の箇所は、スタナ説話の中にも対応形・類似形を見出すことが出来る。特に「太陽と月に道をきくがわからない」がハリバツタと一致することは興味深い。

次にトンブソンは、白鳥乙女のモチーフが出る三番目の話型たる MT465 「美しい女房のために苦難に会う男」を説明して、彼は「この話がかともとは東欧のものであることは明らかである」という（荒木・石原訳、上、一四六頁・Thompson, p. 93）。従って、アジアにおける天人女房の民話を考察するには MT465 を除外して、MT313 と MT400 の二つの話型を参照すればよい。その二つの話型はどちらも内容的に重なっている部分が多いが、インドのスタナ説話は呪的逃走のモチーフを持たないので、基本的には MT400 にあたると見るのがよい。この MT400 という話型はアールネとトンブソンの話型カタログ (Aarne & Thompson, *The Types of the Folktale: A Classification and Bibliography*; 2nd revision, 1961, FFC 184) の話型番号を意味しているの<sup>10</sup>、AT400 と表現したほうが一般的であるが、二〇〇五年に新たにウター Hans-Jörg Uther が再編集した話型カタログ (FCF 284-286) が出て、以前の話型 AT400 が ATU400 として、内容が大きく書き直された。新しい ATU400 では以前の AT400 の話型を三つの異なる型 (1) (2) (3) に分裂させて、すっきりした形にしている。その三つの型のうち、天人女房（白鳥乙女）に dotyczące 重要な三番目の話型、ATU400 (3) は次のようなものである。「若者は鳥の群が岸におりるのを見る。鳥たちは羽毛のコートを脱ぎ、美しい乙女になる。鳥たちが水浴びしている間に、若者はいけばん美しい乙女の羽毛のコートを盗む。その乙女は、ほかの鳥たちとともに去ることができず、そのため若者と結婚しなければならぬ。後に不注意で、乙女が自分のコートを手に入れ、飛び去る。乙女は若者に異界の自分の行き先を教える。男は妻を探しに出発する」(ウター『国際昔話型カタログ』加藤訳、一九四頁・原本 Uther (2004), I, pp. 231-233)。この ATU 400 (3) の話型にスタナ説話はよく合う。違いは、キンナリーというインドの特殊なモチーフが、インド外でも通用する白鳥乙女のモチーフ (D361.1) になっている点であるように思う。なお古い MT313 (呪的逃走) の白鳥乙女が出てくる形は新しい話型カタログで ATU 313 (2) となっており、その型 (2) の導入部分は次の如くである。「若者は、少女たち（少女に変身した白鳥たち）が湖で水浴びをしているのを見て、そのうちの一人から白鳥の衣を盗む。少女は若者との結婚に同意し、若者を自分の父親の家へ連れていく。」(加藤訳、一六四頁)

(10) *Enzyklopädie des Märchens*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, Bd. 12, S. 311-318.

- (11) 稲田浩二他四名編 (一九七七)・『日本昔話事典』、弘文堂、六二二～六二三頁。
- (12) 中国の羽衣説話を研究した君島久子 (一九八四) は、二〇世紀に採集された中国の口承の羽衣説話を分類して「七夕型」「七星始祖型」「難題型」の三つに分け、その三つのタイプにおける分布図を示している。このうち「七夕型」は中国の中部以北に多く分布し、「七星始祖型」は揚子江以南を海沿いに南下して広東・広西にかけて分布している。「難題型」は、「大陸西南の奥地に住む苗族、傣族をはじめとする少数民族から、山東省、内蒙古と、比較的文化果つる地域に分布する」と君島は表現する。私は、この現代中国における口承の「難題型」の羽衣説話はその分布状況から判断して、中国の漢民族の文化の中で自然に生じたものではなく、西のチベット・モンゴルの仏教文化、また東南アジアの仏教文化との接触によって生じたもので、インド仏教起源のものである可能性が高いと考えている。三～四世紀頃からすでに「難題型」を有していたインド仏教は、アジアにおける「難題型」の拡がりの源として位置づけられる。――なお大林太良 (一九八〇) は、中国の「七夕型」と「七星始祖型」が共通の原型から分化して生じた可能性を考え、そして『玄中記』の羽衣説話の記事が、すでに天女が星であることを示唆しているから、「七星始祖型」の原型にかなり近いものではないかと推測する。そして星型の羽衣説話は本来、難題要素を欠いていると見る。このように、難題要素をもつか、欠くかで、インド系と東アジア系 (中国の漢民族系) を起源的に区別してよいのではないか。吉川利治 (一九八二、三六三頁) は次のように記す。「インドの説話こそが難題型の典型であり、(中略) …七星要素のない難題型のインド説話と、難題要素を欠いた七星または七夕型の東アジア説話との二つの大きな派があると考えられる。」
- (13) 『葉事』の中にあるスダナ説話はギルギット本 (Mulasarāśhvādayāya, ed. N. Dutt, i. 123.15-159.16) と蔵訳デルゲ版 (dul ba, kha 202-219) にある。その『葉事』のスタン説話は仏教梵文説話集『ディヴィヤ・アヴァターナ』の第三〇章 *Divyāvāna*, 30 *Sudhanakumārāvāna*, Cowell & Neil (1886), pp. 435-461 にあるものと同じのテキストであって、もともとその『ディヴィヤ・アヴァターナ』にあるスダナ説話は根本有部律『葉事』から抜き取られたものである。
- (14) *Mahāvastu* の *Marcinik* 校訂本 II, pp. 131-150 (= 古く *Senart* 校訂本では II, pp. 94-115) にスダナ説話 (*Kumarjataka*) の梵文テキストがある。
- (15) *Straupe* (2006: 31) も、クシエーメンドラのスダナ説話は全体的にハリバッタとよく一致すること、しかしその作品にはハリバッタよりも『葉事』に似た記述を示す箇所もいくつか存在することを指摘し、そしてクシエーメンドラが創作において、現存する『葉事』とよく似ているが同じではない (特に旅の箇所ではより詳細な描写を有する) 異なる『葉事』のヴァージョンを利用したであろう。

と推測している。それ故、ハリバッタとクシエーメンドラの両者が一致する点については、それはクシエーメンドラがハリバッタを参照したためか、それとも両者が共通の別の源泉を利用したためか、判断するのは困難であるが、少なくともクシエーメンドラがハリバッタだけを利用して作ったのではないことは確かである。現存する根本有部『薬事』のスタナ説話は、有部系の最古のテキストではありえず、より詳細なソースを編集し直して作った―その時に特に旅の箇所では記述がひどく省略された―特殊なヴァージョンであると考えてよい。つまり現存する『薬事』のスタナ説話とは別系の有部のソースが古い時代に存在し、それを種本として、ハリバッタやクシエーメンドラのスタナ説話が作られたと見てよい。

- (16) この(二)ハリバッタと(三)クシエーメンドラの両方のスタナ説話に見られる、「河岸の葦をすべて根こぎせよ」「その土地に胡麻を播き、それを再び集めよ」という二つの難題に関して、(一)根本有部律『薬事』のスタナ説話のテキストと、『デイヴィヤ・ヴァダーナ』の同話のテキストの間には奇妙な不一致がある。『薬事』では、漢訳でも蔵訳でも、それらの二つの農耕試練の記述が存在しない。それに対して、その『薬事』から同一のテキストが抜粋されて作られたはずの梵文説話集『デイヴィヤ』の方には、明らかに他のテキストから取ったらしい、それらの二つの農耕試練を含む韻文が強引に挿入されていて、その点が『薬事』との難題記述の違いになっている。『デイヴィヤ』の文中における、それらの韻文の存在の不自然さは、或る時代に写本にそれらの偈が書き込まれた故に生じたものである。『デイヴィヤ』のそれらの韻文は、実は(三)のクシエーメンドラのスタナ説話のテキストからのコピーである。Divyavadana, 458:25-30 (三偈)と459:7-10 (二偈)は、クシエーメンドラのテキスト Strabo (2006), vv. 314-316, 321-322 (Das and Vidyahutsana, vv. 313:315, 320:321) と同一である。クシエーメンドラの同話の韻文テキストにおいて『デイヴィヤ』には無いその二つの農耕試練が語られていることに気がついた或る時代のネパールの学僧が、写本の余白にそれらの偈を書き込んだために、結果的に『デイヴィヤ』のテキストに、『薬事』には本来無かった二つの農耕試練を追加した事になったと推測される。

- (17) 松江崇(一九九九)一二頁によれば、『六度集経』は二五二年の訳出である。

- (18) インド仏教のスタナ説話の諸伝承は、小乗仏教諸部派の間に生じた独自の伝承をそれぞれ伝えているものとして捉える必要があるが、現存資料を大きく分けると、(A)非有部系と(B)有部系の二つの大枝がある。(A)に属する『六度集経』と『マハーヴァストゥ』の伝承はあまり話が面白くないが、(B)はそれを語り物として面白いように改めることによって成立した、進化した形なのかもしれない。歴史的にみて、(B)系がこの話を高い人気にするのに貢献した。この(B)有部系の大枝の中に、(B1)根本有部『薬事』(『デイヴィヤ・ヴァダーナ』)の系統と、(B2)ハリバッタとクシエーメンドラの系統、という二つの枝がある。こうイメージすると諸伝承の位置

関係が掴みやすい。なおインド外の、インド文化圏に属するものとしては、十八世紀初頭の頃にネパールで作られた梵文のスタナ説話が『パドラカルパ・アヴァダーナ』(Bhadrakalpavāna) 第二十九章としてある。それは Straupe (2006) (2007) が報告しているように、特にクシェーメンドラのスタナ説話の傍を頻繁に借用し、また『ディヴィヤ』も参照しながら、話を再話している韻文作品である。その他、熊本裕 (一九八五) や H. W. Bailey (1966) 等が報告するコータン語の『スタナ・アヴァダーナ』と、田辺和子や P. S. Jaini や P. Skilling など多くの学者が研究をなす東南アジアの大陸部で作られた数種のパーリ語の非聖典文献『パンニャーサ・ジャータカ』中にあるスタナ説話がある。コータン語のものや『パンニャーサ』をどう位置づけるかは難しい問題だが、田辺 (一九八〇) と Jaini (1966) と Straupe (2006) がスタナ説話の諸本の詳細な比較を行っている、参考になる。特に『薬事』とハリバッタとクシェーメンドラの三者の比較については Straupe (2006: 8-35) の説明を参照すべきである。

(19) 日本語訳以外の近代語訳としては、(一)は Schiefner (1882: 4474) のチベット大蔵経からの英訳と、Tachman (2005: 219-307) の梵文からの英訳があり、(二)は Kuroche (2017) の英訳、(三)は Straupe (2009) の独訳がある。

(20) 関敬吾 (一九六六) は、天人女房(羽衣)の話型について説明し、難題求婚型については、世界ではほ四つの亜型に分かれると述べて、「北欧・アイルランド・オランダ・ロシア・ギリシア・ルーマニア・ハンガリー・トルコ・インド、さらにアメリカにも分布している」(二七頁)と記す。関のその記述からわかるように、この時期の日本の民話学は日本以外のアジア地域について手薄であり、手堅くあらゆる努力を日本国内の伝承を纏める方に集中させながら、日本以外の研究はほぼ西洋の民話学者の報告にまかされていた。天人女房難題求婚型について、むしろアジア地域を中心にしてアジア各国のデータをより細かく積極的に集めてゆくと、西洋などの地域よりもうまく纏められる見通しがついてきたのは、関以後の時代になってからである。―また同書で関は、「飛び衣の略奪と結婚」の白鳥乙女のモチーフの起源をインドに求める見解がヘルゲ・ホルムストレーム Holge Holmstrom によって出されたことを述べ、そして「大部分の学者も、この見解を支持している」と記す。しかし西洋の学界で一九一九年に出されたそのインド(あるいは中央アジア)起源説の学説について、関は軽く紹介するにとどめ、深追いしなかった。関以前に、白鳥乙女の世界の口承伝承についてはすでに西村真次 (一九二七) の研究があった。

(21) 吉川利治にはこの八二年の和文論文に続いて、英文論文として Yoshikawa (1984) がある。

(22) 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』という仏教説話集の編集成立年代はさほど古いものではない。インド仏教の衰退期に、かつての創作力を失った仏教徒たちが写本に筆写し編集したもので、その内容は他の作品からのアヴァダーナ諸説話の借用だけで出来ている。



その作品集は十七世紀にネパールで再編集されて現在の形になったが、その原形たる説話集は恐らくインドで七～十世紀頃に編集され、貝葉写本としてネパールに伝えられたのであろう。根本有部のスタナ説話を論じる時は、成立が遙かに古い根本有部律『薬事』のほうがオリジナルであるので、『ディヴィヤ』ではなく『薬事』の伝承として語るべきである。

- (23) 天人女房の類話が見出せる国書として、『日本昔話事典』の「天人女房」の説明の末尾に、『歌林拾葉集』『雑話話』『近江国風土記』『丹後国風土記』『遺老説伝』の名を挙げている。また稲田(一九九八)『日本昔話通観(研究編二) 日本昔話と古典』では、『袖中抄』『元々集』『帝王編年記』『琉球国由来記』などの国書を挙げている。しかし漢訳仏典の中にあるスタナ説話などの類話の調査は行われていない。

- (24) 熊本裕(一九八五)や H.W. Bailey(1966)の論文を参照のこと。

- (25) 西アジアにおける羽衣説話にあたる話の代表例として、アラビアの『千一夜物語』(九世紀以降)に次の二つの話がある。前嶋信次訳『アラビアン・ナイト十一』(東洋文庫、一九八〇年)、「ジャン・シャールの話」第五〇〇～五三二話。また池田修訳『アラビアン・ナイト十五』(東洋文庫、一九八八年)と「十六」(一九八九年)、「バスラのハサン物語」第七七八～八三二夜。その羽衣説話について井本英一(一九八七)が論じている。

- (26) 『パンニャーサ・ジャータカ』のスタナ説話は明らかに有部系の伝承が東南アジアの大陸部に残存した結果作られたものである。『パンニャーサ』と根本有部『薬事』の伝承の類似性はすでに多くの研究者によって指摘された。

- (27) 『望月佛教大辞典』五四三～五四四頁、『図説佛教語大辞典』一九〇～一九一頁、『密教大辞典』三三二〇頁の「キンナラ」の項。また干潟龍祥(一九八一)の図版四二、五五、五九。

- (28) もしキンナラをガンダルヴァとほぼ同一の半神の種族と見るなら、仏教のスタナ説話はその点で、ヴェータにまで遡る古さをもつ有名なインドの神話「ブルーラヴァス王とアプサラスのウルヴァシー」との接点を有することになる。その神話は、アプサラス(水の精女、天女)のウルヴァシーが水鳥の姿で池で泳いでいるのを主人公の王が見つける。アプサラスは半神ガンダルヴァたちの妻であり、インドラが続べる天界の神々の快樂の接待役であるが、姿は人間の美女と同じである。変身能力があるとはいえ、なぜウルヴァシーが水浴時に水鳥の姿をしていたのかは不明である。ガンダルヴァたちに鳥的な属性が色濃くあることと関係しているのだろうか。アプサラスは彼らと共に、樹々に棲む性質をもつとされる。またウルヴァシーがブルーラヴァス王との同棲の後に去って帰る故郷は、ガンダルヴァたちの住む(天界ではない)領域であるが、それ故王はガンダルヴァたちの住む領域に立ち去ったウル

ヴァシーと再び一緒になろうと、人間たることを捨てて、自らガンダルヴァになって、王は彼らの国でウルヴァシーと暮らすという形で話が終わる。これはスタナがキンナラたちの国に行つて、彼らの国で認められてマノーハラと再び結婚生活を送るという話の展開と対応しあうように思われる。つまり、マノーハラが地上に棲むキンナラ族に属する女であるというスタナ説話の設定は、きつと偶然ではなく、アプサラスが半神ガンダルヴァの配偶であることと繋がっているのであろう。ただし一方は神話であり、他方は民話起源の仏教説話であるという重要なジャンルの違いがある。この「白鳥乙女」を連想させるモチーフをもつウルヴァシーの神話については Leavy (1994), p. 34; Haino (1961), p. 345; 田中於菟弥 (一九九一)、一九七頁以下などを参照した。

- (29) 古代の仏教徒にはキンナラたちをただの動物とみる見方もある。キンナラ夫妻が出てくるパーリ正典『ジャータカ』第四八一話(タッカーリヤ本生)の第七詩節で、「この者たちは天人でもなく、ガンダルヴァの生まれでもなく、たかがげものだ。だから(獵師などに)つれてこられたのだ。一匹はわが夕餉に料理せよ。いま一匹はわが朝餉に料理せよ。」(『ジャータカ全集』春秋社、六卷二四六頁: PTS ed., Vol. 4, p. 252, v. 110) という言葉が王によつて、捕獲したキンナラ夫妻への処置として、部下に語られており、その古典ジャータカの韻文から、キンナラ族を神でもガンダルヴァでもなく(まるで鳥のように)ただの動物として扱い、料理して食べてもよいという軽蔑的な見方が古代の人々にあつたことを知ることが出来る。

- (30) 『人を惹きつける徳性』(ābhigamkeguna)の語は、第六話ルーピヤールヴァティ、六・三二六+でも出て来た。岡野(二〇一九):「ハリバッタ・ジャータカマーラー研究(二)」、九八頁、注七を参照。

- (31) この第一七詩節の後半を蔵訳によつて訳した。本章に関して現存する唯一の梵文写本Bには欠損があり、第一七詩節の pāda の「王よ、それと同様に、もし」の言葉の後の、それに続くはずの写本二葉 (GS 57, 58) が見つからないため、出版された梵文ではその箇所から第五三詩節の pāda a までは梵文テキストが欠けている (Strandé et al., p. 285)。そのため、Khoroché (2017) の英訳では本章のこの大きな梵文欠損箇所を訳していないが、私は蔵訳を用いて第一七詩節後半から始まるその欠損箇所をすべて訳した。この蔵訳にはあちこちに解釈が難しい箇所があり、そこにも一応の訳をつけてみたため、誤訳もあるであろうが、その点をどうか寛恕されたい。以下、蔵訳に基づいて和訳した詩節やパラグラフの文頭には、\*(アステリクス)の印を付けている。

- (32) クシェーメンドラのテクストでは (v. 88-89) この人物はヴィディヤラ族(魔力を有する半神の種族)ではなく、龍を捕獲できる真言の持ち主 (nāgahandhanantirī) の、ヴィディヤラ(持明者)という名前の者である。

- (33) この第二八詩節の蔵訳は六つの pāda から成り、その pāda ab の文と cd の文はほぼ同じ意味である。訳すと、次の通り。「かくも力



ある蛇王よ、あなた様にとつての、その困難とはいかなるものでしょうか (a<sub>2</sub>)。かくも力あるあなた様にとつての困難とは、蛇王よ、それはいかなるものでしょうか (a<sub>3</sub>)。輝く知性をもつ「あなた様」が、野生の生き物を殺すことに執着する者たる私に頼ることによつて、どうして「その困難を」なくせるのでしょうか (a<sub>4</sub>)。「ハリバッタがこのような無駄な文のある詩節を作ったはずがなく、a<sub>2</sub> か a<sub>4</sub> のどちらかの文を削るべきである。本来この詩節は四つの pada から成るものであったが、チベットの翻訳者が紙に記した推敲前の文 (a<sub>1</sub>) と推敲後の文 (a<sub>2</sub>) の両方がうっかり残ってしまったものではないかと推測される。

(34) 湖に棲む龍がこのアモーガという超自然的な輪索の武器をもっているのはなぜなのか。本章の第四四詩節にある「ヴァルナ神(水神)の如く、それで捕縛して」という言葉がその疑問を解くヒントになる。インド密教の伝統では、このヴァルナ神は持ち物として「蛇の輪索」(龍索、蛇索)をもちと<sub>2</sub>xt<sub>2</sub>れてゐる。Lokesh Chandra (1999-2005), Vol. 14, s.v. "Varuna", pp. 4246-4259; Bhattacharya (1959), p. 361; 『密教仏像図典』(1984), p. 292 「ヴァルナ・水天」・『密教大辞典』(1983), p. 2244 「龍索」の説明を参照。このようにヴァルナ神は水神として、もともと水に棲む龍蛇と関係があり、八大龍王のマンダラにも描かれる神であるから、その神の持ち物である「龍索」を或る龍王が持っていたとしても不思議ではないわけである。

(35) 第五三詩節の「腰の所をその投げ縄に捕らえられた」の句 (pada a にあたる) は藏訳から訳したが、ここで梵文写本の欠損が終わり、以下は章末まで梵文テキストがあるので、梵文から訳した。

(36) 白斑のある黒鹿 (Kṛṣṇasara) がまるで大地の一つの眼のよう、というこの比喩は第十一話(鹿ジャータカ)第二詩節にも見られるが、ここでは、鹿が流し目〔をした一つの眼〕(Kakṣai) のように光り輝いて見える、と表現される。Khoroché (p. 238, note 115) はこの比喩が、カーリダーサの『ヴィクラマ・ウルヴァシーヤ』第四幕の第五七詩節 (Rao & Shulman (2009) では第五九詩節) にある、斑のある黒い肌をした鹿が森の女神の「流し目」に喩えられる表現と関係があるかも知れないと記す。つまりカーリダーサの第四幕とハリバッタの第二五話の間に影響関係があったという仮説の二根拠になるかも知れない比喩である。

(37) 愛する女性を失って半狂乱になった主人公が、森の中を彷徨いながら、そこで出会った様々な動物や蜂や神格に、その女性の行方を探ね歩くという点で、その探索の場面はカーリダーサの戯曲『ヴィクラマ・ウルヴァシーヤ』Vikramorvasya の第四幕とよく似ていることが Jaini (1966: 543) や Khoroché (2017, p. 238, note 114) に指摘されている。カーリダーサのその戯曲では、アプサラスの美女ウルヴァシーを探し求めて森の中を歩むブルーラヴァス王が呆けた状態で、孔雀↓雌の郭公↓ハンサ鳥↓チャクラヴァーカ鳥↓蜜蜂↓象↓山↓川↓鹿という順序で質問してゆく(第四幕第一八〇詩節、ただし Rao & Shulman (2009) では第一八〇詩節)。他方、

ハリバツタのこの場面では、スダナが鸚鵡↓孔雀↓鹿↓蜜蜂↓チャクラヴァアーカ鳥↓蛇↓太陽↓月という順序で質問してゆく。両作品には孔雀・チャクラヴァアーカ鳥・鹿・蜜蜂の四者が共通しており、とても偶然とは思われない。

この同じ場面が、ハリバツタとカーリダーサの両作品よりも前に成立していたと考えられる根本有部律の『薬事』(Bhāṣṣajavastu)中のスダナ説話にもあることに注意しなければならない。根本有部『薬事』のその場面では、月↓雌鹿↓蜜蜂↓蛇↓郭公(Kokila)↓アシヨールカ樹という順序で、スダナが「マノーハラーを見たか」と次々に質問してゆく。ここで少し比較を試みると、『薬事』とハリバツタでは月と蛇が出てくるが、カーリダーサにはその二者が出てこないで、ハリバツタの語りは『薬事』の伝承(シヴァ教徒のカーリダーサの知らない仏教聖典の伝承)と繋がっていることがわかる。ただしこれに関して少し但し書きを付けると、私は、ハリバツタが現存の根本有部『薬事』と同一の伝承を利用したのではなく、或る有部の一派(カシュミール有部?)がもつ『薬事』に近いスダナ・キンナリーの伝承に基づき、それを種本にして、彼の探索の場面をもつたと考えている。ハリバツタが現存の根本有部の『薬事』と似て異なる、或る有部の一派のスダナ説話を利用したらしいことは、クシェーメンドラの『菩薩アヴァターナの如意蔓』(Bodhisattvādanakālpata) 第六四章のスダナ説話(Sūthanakīṇayavadāna)から推測できる。その第六四章は内容的に見て、根本有部『薬事』(=『ディヴィヤ・アヴァターナ』)のスダナ説話とはあまりに相違点が多いが、他方、ハリバツタの話とは沢山の類似点を見出せ、関係が甚だ近いと言つてよい。第六四章とハリバツタとの間のこの内容の類似性は、第六四章がハリバツタを種本にして再話したためではなく、ハリバツタが種本にしたものと同じ或る源泉資料、つまり有部の一派が有した、現存の根本有部の『薬事』と似て異なる、スダナ・キンナリーの伝承を種本に用いたためであると推測することによつてうまく説明できるものである。そのクシェーメンドラの第六四章で、森でスダナが次々に質問してゆく場面(Pr. 237~238)を見てみると、ハリバツタには無いハン孔雀↓蛇↓鹿↓森の樹(āṇaspaṭi)という順番である。これらの質問相手をハリバツタと比較してみると、ハリバツタには無いハン孔雀が出てくる点では第六四章はカーリダーサと一致するが、しかし鸚鵡・孔雀・鹿・蛇・月の五者でハリバツタと合致するので、全体的に第六四章はハリバツタに近いといえる。また蜜蜂とチャクラヴァアーカ鳥という文学趣味の二者は、カーリダーサとハリバツタの両者に有るのに、この第六四章には無い(ただし、蜜蜂だけは根本有部『薬事』の伝承にも有る)。また第六四章では最後に「森の樹」として、一木がスダナの質問の相手として出てくる点は興味深く、それは根本有部『薬事』の「アシヨールカ樹」(āṇaspaṭi)という伝承とうまく繋がるように思われる。この「森の樹」という、ハリバツタとの重要な相違点は、ハリバツタよりもクシェーメンドラのほうが源泉ソースに忠実な語り方をしてしているために生じているのではないかと私は推測する。――なおクシェーメンドラ第

六四章のこの「森の樹」(vanaspati)の語に関連して、引田弘道の和訳では第二四七詩節(正確には二四八詩節)の rājāmbha の語を「オオバコの木」と訳しているが、その詩節の和訳をそのまま読めば、第二四六詩節(正確には二四七詩節)にある「森の樹」(vanaspati)の語が「オオバコの木」の意味と理解されることになり、アショーカ樹とは無関係になる。しかしその箇所は引田のように解釈せず、Strube (2006), S. 198, v. 248 の独訳のように訳せばよいのではないか。「森の樹」とは「オオバコ」(プランテン、大型バナナの草)のことではなからう。さてこの「アショーカ樹」の伝承は実古く由緒があり、「マハーバーラタ」第三巻第六一章中のナラ王物語にある、夫のナラによって森の中に置き去りにされたダマヤンティーが森の中をさすらう場面において、まさにアショーカ樹が出てくる (v. 96-103)。ダマヤンティーが夫のゆくえを尋ねて話しかける相手は、虎↓山↓苦行林の婆羅門たち↓アショーカ樹 (asokaru) ↓大隊商 (mahasārtha) である。つまりクシューメンドラの「森の樹」や根本有部『薬事』の「アショーカ樹」は、起源的に『マハーバーラタ』から来ていると考えられる。大叙事詩の中のナラ王物語における「愛する者との別離に苦しむ者が森をさすらいながら、出会った者たちに愛する人のゆくえを質問してゆく」という、この「ダマヤンティーの流浪エピソード」の文学モチーフ(すなわち、話を形成する「話の型」)が、大きな影響力をもってサンスクリット文学に定着した結果、古典期の仏教徒やヒンドゥー教徒の作る文学的な諸作品においてその類似の伝承が出てくるのだと私たちは理解すべきであろう。この文学的伝統については Placuzzi (2004) の記述が参照されるべきである。

ハリバッタとカーリダーサは、両者とも活動年代がまだ大まかにしか推測できない詩人であるが、どちらかがどちらかから影響を受けている可能性は確かに排除できない。愛する者の行方を主人公が尋ね歩く場面で見られるこの類似性については、ハリバッタが或る有部の一派の『薬事』の伝承を種本にすると同時に、カーリダーサ(かそれに類する文学作品)からも部分的に影響を受けたという見方がある一方、また逆の、カーリダーサの側がハリバッタ(かそれに類する仏教徒の作品)から影響を受けているという見方も捨てきれない。後者の場合では、諸作品の成立の順序は『薬事』↓ハリバッタ↓カーリダーサ、ということになる。私はこの後者のほうが可能性が高いのではないかと思っている。なぜなら、カーリダーサのこの劇で狂乱の王が種々の相手に尋ね歩く姿を示す第四幕の記述が「ブルーラヴァスとウルヴァシー」の神話の古い諸伝承の他のどこにもソースや類似の記述が見出せない『唐突さ』をもつものに対し、ハリバッタでの狂乱して尋ね歩く同じ場面はさらに古い有部の聖典のスタナ説話からその記述の発想をもらっていることが明白であるから、カーリダーサの第四幕という、源泉たる諸伝承に接点が見出せない『唐突さ』をもつ創作は、彼の独創というよりも、ハリバッタからの影響を受けた結果生じたと考ええる方が自然である。その第四幕の発想の出所を

わざわざ「ダマヤンティーの流浪エピソード」にまで遡って説明する必要はないであろう。両詩人の活動年代に関する研究が今後一層深まることによつて、両者の前後関係の問題が前進すれば、この影響関係の問題も解決に向かうことだろう。

(38) 日本の「天人女房」では女が天に帰る際に、男が天に追ってくるならば草鞋千足を用意せよなどと、天への旅に必要な品を書き置きとして残してゆくが、ハリバッタのスタナ説話でもキンナリーも全く同じ行動をとつて、旅の多数の必需品について書き置き(手紙)を残す。しかし『薬事』のスタナ説話には書き置きは出てこず、仙人への伝言の中で旅の必需品や経路などのすべてが語られるだけである。これは「書く」よりも「暗誦する」ことを当然としている、インドの僧院の古い伝統の中で『薬事』にある本説話が成立したことを示す。

(39) マノーハラリーの書き置きには旅の援助者として一匹の猿が必要ということも、記してあつたわけである。従つて、旅を完遂するために用意が必要になるものとして、琵琶・二本の鉄の長くぎ(楔・槌・剣・矢・弓と、援助者の猿、そしてマノーハラリーが与えた菓草の、合計八つがある。ハリバッタの作品では、これら八つのもが旅のどの場面で作られるかがきちんと説明されている。(ちなみに日本の「天人女房」でも、天への旅の準備品とは別に、その旅の援助者として犬を連れてゆくという伝承が所々に見られるのは面白い。篠田知和基(二〇〇七)、一〇一頁参照。この犬が、スタナ説話の猿にあたるわけである。『六度集経』と『マハーヴァストウ』のスタナ説話では、旅の達成にこの猿が最も大きな役割を果たす。)―さてハリバッタ以外の諸作品のスタナ説話で、旅の準備品の伝承がどうなっているかを見てみると、根本有部『薬事』の語るスタナ説話では、菓草と猿のほか、呪文・琵琶・三本の鉄の長くぎ(*ayastha trayah*)・矢・弓・輝きを本性とする複数の寶石(*manayo vahaśmakhā*)・解毒の薬が語られ、合計九つである。この律蔵説話の語りでは、それら九つのもがどの場面で作られるのか、部分的にしか明らかにならない。三本のうちの、一本の鉄の長くぎは、羅利女の額に打ち込むのに使う。弓と矢は洞窟の中にいる毒蛇を殺すのに使い、またその後にはヤクシャと羅利を殺すのにも使う。またアーシーヴィシャーという所で蛇毒(「に効く」)呪文(*sarpvisamantā*)を使う。またヴェートル川では鋭い刀(*Uśma-sastra*)を使うとも語られるが、その鋭い刀はなぜか、伝言で列挙された用意すべきもののリスト(*Divyādāna Cowell & Neil* (1886), 455, 23, 27)の中に入っていない。またそのリストの中にある「輝きを本性とする複数の寶石」と「解毒の薬」はどこで使うのか、記述がない。このように見ると、根本有部『薬事』における旅の冒険の詳細についての語りは不十分で部分的なものであり、旅で必要になるものがそれぞれどういう場面で使われるかの説明が本来そこには存在していたはずなのに、それが完全な状態で伝えられていなかったことがわかる。ハリバッタを読んで始めて、その『薬事』が語る三本の長くぎ(楔)のうちの、残りの二本の用途がわかるわけであり、また一匹の

猿が、また楽器である琵琶が、どのように旅の中で役立つのかわかるわけである。このように不完全な伝承にすぎない現在のよう  
な根本有部『薬事』の記述をハリバッタが種本にしたはずはないから、きっと別系の有部の『薬事』にはより完全なスダナの冒険  
の旅の記述が存在していて、ハリバッタはそれを用いたのであろう。その、「より完全な冒険の旅の記述」が存在するという推測を  
裏付けるのがクシェーメンドラの語るスダナ説話である。クシェーメンドラは明らかに現存する根本『薬事』（『ディヴィヤ・ア  
ヴァダーナ』）のスダナ説話でもなく、ハリバッタの本作品でもない、第三の資料を種本にしてスダナ説話を全部韻文にして再話して  
いる。ハリバッタもカーヴィヤ詩人としての自由な立場から、その第三の資料に近い伝承を種本にしているように思われる。

(40) インド説話におけるこのような機械人間にあたる文学モチーフがどれだけ古い時代まで遡るのかを考える時に、スダナ説話は重  
要な考察材料を提供する。ここでの機械人間は小さな鉄棒(iron rod)つまりスイッチレバーによって停まったり作動したりする仕組み  
である。幅田浩美(二〇二二)はトカラ語版の「機械仕掛けの少女の説話」を研究して、その仏教説話を含む写本にはクマラーラ  
タ *Kumarata* の名が記してあることに気づいたという。すると機械人間のモチーフはクマラーラタ(三世紀頃か)の時代には西北  
インドの仏教文献に存在していたのかも知れない。ちなみに十一世紀の梵文説話集『カター・サリット・サーガラ』七・九(= *Brockhaus, chap. 43, vv. 10-15*)では、一人の人間の王を例外として、その王の都の民衆や象や馬すべてが機械で出来ているという驚く  
べき一都城の話が出てくる。

(41) ハリバッタのスダナ説話ではここで水甕を運ぶ女に菩薩は指輪を直接手渡しているが、『六度集経』や『マハーヴァストゥ』や根  
本有部『薬事』のスダナ説話では女に気づかれぬよう、秘かに水甕の中に指輪を投げ入れており、こちらの方が話の本来の伝承で  
あろう。ハリバッタは援助者としてその女を後で再び登場させるために、話の展開を変えたのではないかと思われるが、しかしク  
シェーメンドラのスダナ説話でも、水を運んだ女は菩薩が指輪を投げ込んだことに気づいていた(292)。すると、ハリバッタとク  
シェーメンドラが属する有部の別系の伝承では、こっそり指輪が投げ込まれたという形になっていなかった可能性もある。しかし  
クシェーメンドラが創作時にハリバッタの記述から影響を受けた可能性もある。一なお長く別れた男女の間の再認識の道具とし  
て一箇の指輪がカーリダーサの『シャクンタラー』に出てくることは有名である。このモチーフは *Thompson, Motif-Index, H 94* 「指  
輪による認知」(Identification by ring)。

(42) *Khoroché* (p. 239, note 123) に「これ「胡麻を播いて、再び集める」という試練のモチーフは、『カターサリットサーガラ』に  
も見出せる。その説話集の七・五(= *Brockhaus, chap. 36*) 第七九詩節以下で語られる、羅刹の都城にやって来た *Śringahujā* 王子と美

しい羅刹の娘 *Rupasikha* の結婚譚においては、娘の父である羅刹王 *Agusikha* によって胡麻の試練が王子に課されるが、スタナ説話のように神々からの援助が起るのではなく、その羅刹の娘が魔力を用いて地面を耕して胡麻を播く。胡麻の回収においてもその娘が魔力によって無数の蟻を創り出して、蟻に胡麻を集めさせる。この胡麻の試練が娘の父によって王子に課される前に、別の試練として「百人の似た姿の姉妹がいる中からお前の愛しい女を見つけよ」という試練も課される。娘は自分だけが首ではなく額にネックレスをつけていることを事前に王子に知らせることで、その試練が達成される。その後、この話では羅刹王からの二人の呪的逃走のモチーフが出てくる。

(43) この散文の後に、短い散文と二つの詩節がテクストに存在する。それを訳せば、次のとおり。

◇ 世尊はこのジャータカを以上のように、比丘たちの前で説明されました。【散文】

勇ましい精進と力を見えた王子スタナは私(釈尊)であった。

美貌と幸せな運命を見えたキンナリーは〔今世の〕ヤシヨーダラーであった。【詩節一】

かつて私は彼女を因として、あれこれの苦を得ました。

愛欲に心が満ちた者は、概して苦悩の器となるのです。【詩節二】

この散文と二つの詩節は *Strabe* 校訂本では小さな活字で印刷されている。これらの詩節は釈尊が前世でヤシヨーダラーへの愛のため苦しんだことを語るものであり、クシェーメンドラ第六四章のスタナ説話の第三三六偈 (*Dās* 本では三三五偈) に内容的に類似する。しかし、韻文として到底ハリバッタの真作とは思えない。後代の付加と判断して差し支えない。

#### 参考文献

Bailey, H. W. (1966): "The Sudhana Poem of Raddhiprabhāva", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 29, No. 3, pp. 506-532.

Bhattacharya, Benoytosh (1959): *The Indian Buddhist Iconography. Mainly Based on the Sāhjanamāla and Cognate Tāntric Texts of Rituals*, second edition, Calcutta.

Cowell, E. B. & Neil, R. A. (1886): *The Divyāvadāna. A Collection of Early Buddhist Legends*, Cambridge.

Lokesh Chandra (1999-2005): *Dictionary of Buddhist Iconography*, 15 vols. International Academy of Indian Culture, New Delhi; Aditya Prakashan.

Demoto, Mitsuyo (2009): "How It All Began (II) The Prabhāsa Legends of the Xianyuqing", *Journal of the Centre for Buddhist Studies*, Sri Lanka.



Volume VII, 2009, pp. 1-20.

**Hahn, Michael (1981):** "Das Datum des Haribhakti", in: *Studien zum Jainismus und Buddhismus*, Wiesbaden: Franz Steiner, pp. 107-120.

**Hatto, A.T. (1961):** "The Swan Maiden: A Folk-Tale of North Eurasian Origin?", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London, 1961, Vol. 24, No. 2 (1961), pp. 326-352.

**Hornier, L.B. & Jaini, P.S. (1985, 1986):** *Apocryphal Birth-Stories (Paññasa-Jātaka)*, 2 vols., London: Pali Text Society.

**Jaini, Padmanabh S. (1966):** "The Story of Sudhana and Manoharā: An Analysis of the Texts of and the Borobudur Reliefs", in: *BSOAS* 39, pp. 533-538.

**Khorroche, Peter (2017):** *Once a Peacock, Once an Actress: Twenty-four Lives of the Bodhisattva from Haribhakti's Jātakamālā*. London / Chicago: The University of Chicago Press.

**Leavy, Barbara Fass (1994):** *In Search of the Swan Maiden: A Narrative on Folklore and Gender*. New York/London: NYU Press.

**Le Cog, A. v. & Waldschmidt, E. (1928):** *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, 6. Teil, Berlin.

**Miller, Alan L. (1987):** "The Swan-Maiden Revisited: Religious Significance of "Divine-Wife". Folktales with Special Reference to Japan", *Asian Folklore Studies*, Vol.46, 55-86.

**Pieruccini, Cinzia (2004):** "Landscapes of Feelings: Addressing Nature in Search of the Beloved", in: *Pandanus '04: Nature in Literature*, ed. Jaroslav Vacek, Prague.

**Rao, Velcheru N. & Shulman, David (2009):** *How Urvasi was Won by Kālī-dāsa*. Clay Sanskrit Library, NYU Press.

**Schiefner, F. Anton von (1882):** *Tibetan Tales*. Translated from the German by W.R.S. Ralston. London: Kegan Paul, Trench, Trübner.

**Schlingeloff, Dieter (1973):** "Prince Sudhana and the Kinnarī: An Indian Love-Story in Ajanta", in: *Indologica Taurinensia*, 1, pp. 155-168.  
 — (2000): *Erzählende Wandmalereien*. Narrative Wallpaintings. Vol. I: Interpretation. Vol. II: Supplement. Vol. III: Plates. Wiesbaden.

**Singh, Rajesh Kumar (2017):** *Photographic Compendium of Ajanta Narrative Paintings: Vol. I Ajanta Cave No. 1*. Vadodara: Harisena Press.

**Straube, Martin (2006):** *Prinz Sudhana und die Kinnarī. Eine buddhistische Liebesgeschichte von Ksemendra. Texte, Übersetzung, Studie*. Indica et Tibetica 46, Marburg.

— (2007): "Die Adaptation von Ksemendras Sudhanakarmyavadāna im Bhadrakalpāvadāna", in: *Indica et Tibetica. Festschrift für Michael Hahn*,

- herausgegeben von Konrad Klaus und Jens-Uwe Hartmann, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 66, Wien, S. 521-538.
- (2019) *Haribhatta's Jātakamālā. Critically edited from the manuscripts with the help of earlier work by Michael Hahn*, Pune Indological Series II, Dept. of Pali, Savitribai Phule Pune University, Pune.
- Tatelman, Joel (2005): *The Heavenly Exploits: Buddhist Biographies from the Dryāvadāna*, Vol. 1, New York: NYU Press and JJC Foundation.
- Thompson, Stith (1975): *The Folktales*, Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press.
- Yoshikawa Toshiharu (1984): "A Comparative Study of the Thai, Sanskrit, and Chinese Swan Maiden", in: *International Conference on Thai Studies*, Chulalongkorn University, pp. 197-213.
- 稲田浩一他四名編 (一九七七): 『日本昔話事典』, 弘文堂。
- 稲田浩一 (一九八八): 『日本昔話通観 (第二八卷) 昔話タイプ・インデックス』, 同朋舎。
- [編] (一九九三): 『日本昔話通観 (研究編二) 日本昔話とモンゴロイド—昔話の比較記述』, 同朋舎。
- [編] (一九九八): 『日本昔話通観 (研究編二) 日本昔話と古典』, 同朋舎。
- 井本英一 (一九八三): 『羽衣の話』『世界口承文芸研究』 第三号, 一八一〜二一六頁。
- 井本英一 (一九八七): 『中近東の羽衣説話』『民間説話の研究 日本と世界』, 同朋社, 二八九〜三〇五頁。
- 岩本裕 (一九七四): 『佛教聖典選第二卷佛伝文学・佛教説話』, 読売新聞社。(「スグナ・クマーラ=アヴァダーナ」の訳, 二八五〜三三四頁)
- 宇治谷祐憲 (一九八七): 『蘇るポロブドゥール』, アジア交流センター。
- 日・J・ウター (二〇一六): 『国際昔話話型カタログ 分類と文献目録』, 加藤耕義訳, 小澤昔ばなし研究所。
- 大地原豊 (一九八九): 『公女マラーヴィカーとアグニミトラ王 他一篇』, 岩波文庫。(カーリダーサの戯曲『武勲(王)に契られし天女ウルヴァシー』の訳)
- 大林太良 (一九八〇): 『中国・東南アジアの星型羽衣説話』『山下達郎博士古稀記念 東南アジア・インドの社会と文化』上, 三三三〜三四三頁。
- 岡野潔 (二〇一〇): 『仏教説話の世界』, 奈良康明・下田正弘編『新アジア仏教史03 仏典からみた仏教世界』, 佼成出版社, 六二〜六五頁。



君島久子(一九八四)：『中国の羽衣説話』、福田晃編『日本昔話研究集成第2巻 昔話の発生と伝播』、名著出版、一八三～二一〇頁。  
 熊本裕(一九八五)：『コータン語文獻』、山口瑞鳳編『敦煌胡語文獻』、講座敦煌六、大東出版社。(コータン語のスタナ説話の解説、一六四～一六九頁)

後藤敏文(二〇一〇)：『資料ヴェエダ文獻に見られるブルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語』、篠田知和基編『愛の神話学』、楽耶書院、四八一～五二五頁。

佐和隆研他七名編(一九八三)：『密教大辞典』、改訂版・縮刷版、密教辞典編纂会、法蔵館。

篠田知和基(二〇〇七)：『天人女房』と世界の類話』、『広島国際研究』一三三号、九三～一九九頁。

G・シヨベン(二〇〇〇)：『大乘仏教興起時代 インドの僧院生活』、小谷信千代訳、春秋社。

杉本卓洲(二〇二二)：『インド・ジャータカ図の研究』、起心書房。

P・スキリング(二〇〇五)：『東南アジアにおけるジャータカとパンニャーサ・ジャータカ 畝部俊也訳』、『真宗総合研究所研究紀要』二二号、一一～七四頁。

関敬吾(一九六六年)：『昔話の歴史』、日本歴史新書、至文堂。

——(一九八〇年)：『関敬吾著作集四 日本昔話の比較研究』、同朋舎。(『羽衣考』七四～八九頁)

田中於菟弥(一九九二)：『酔花集 インド学論文・訳詩集』、春秋社。

田辺和子(一九八〇)：『Pamasa-jataka 中の Sudhana-jataka について』、『印度学仏教学研究』五六号、五八～六三頁。

——(一九八二)：『タイに伝わる『パンニャーサ・ジャータカ』(50ジャータカ)』、『佛教学』一一号、六五～八八頁。

——(一九九六)：『インド・東南アジア・日本に伝わる羽衣説話について』、『東方』一二号、一一～一七頁。

辻直四郎(一九七八)：『古代インドの説話—プラーフマナ文獻より—』、春秋社。

S・トンプソン(一九七七)：『民間説話 理論と展開』上下、荒木博之・石原綏代訳、東京社会思想社。

中村元(一九八八)：『図説佛敎語大辞典』、東京書籍株式会社。

並河亮(一九七八)：『ポロブドゥール 華嚴経の世界』、講談社。

奈良康明(一九六六)：『アヴァダーナ』、中村元編『仏典Ⅰ』、世界古典文学全集六、筑摩書房。(スタナクマール・アヴァダーナの訳、二九

西村真次 (一九二七) : 『神話学概論』、早稲田大学出版部。

幅田浩美 (二〇二二) : 『機械仕掛けの少女の説話』の仏教化—Kumarañña の Jataka / Avadana 集—』『国際仏教学大学院大学研究紀要』二六号、一八六—二〇二頁。

引田弘道 (二〇〇二) : 『菩薩の偉業物語の如意蔓 (アヴァターナ・カルバラター) 邦訳』『人間文化』愛知学院大学人間文化研究所紀要』一六号、一七三—二〇四頁。

松江崇 (一九九九) : 『六度集経』『仏説義足経』における人称代詞の複数様式』『中国語学』二四六号、一一—二二頁。

八尾史 (二〇二三) : 『根本説一切有部律業事』、連合出版。

吉川利治 (一九八二) : 『タイ族の羽衣説話再考』『世界口承文芸研究』第三号、三五七—三六三頁。

頼富本宏・下泉全暁 (一九八四) : 『密教佛像図典』、人文書院。

六度集経研究会 (二〇〇一) : 『六度集経 仏の前世物語』、法蔵館。

※本研究は JSPS 科研費 (21H00470) の助成を受けたものである。